



創立120周年

東京歯科大学広報



学校法人東京歯科大学理事長 井上 裕先生 ご逝去

平成20年6月22日 午後0時55分、本法人理事長 井上 裕先生が急逝された。享年80歳。井上家の葬儀が6月27日、28日に大本山成田山新勝寺光輪閣でしめやかに執り行われ、金子 譲学長を始め、各方面からの多数の参列者のもと、故人のご冥福をお祈りした。

井上先生は、昭和24年3月東京歯科医学専門学校をご卒業後、無歯科医村に歯科医院を開業、地域歯科医療に貢献する一方で政界に進まれ、昭和38年に千葉県議会議員、昭和51年に衆議院議員、昭和55年に参議院議員を経て、文部大臣、参議院議長等、国家の要職を歴任された。平成2年6月に本法人の理事に就任され、平成5年10月からは理事長として、15年の長きにわたり法人運営の陣頭指揮を執られていた。

なお、自由民主党・井上家・東京歯科大学合同葬が7月31日(木)、東京都青山葬儀所にて、執り行われる。

井上 裕先生ご略歴

昭和24年 3月	東京歯科医学専門学校卒業	平成 3年 1月	学校法人東京歯科大学理事・評議員辞任
昭和36年 3月	東邦医科大学より医学博士号授与	平成 3年12月	学校法人東京歯科大学理事・評議員
昭和38年 4月	千葉県議会議員当選(連続3期)	平成 5年10月	学校法人東京歯科大学理事長
昭和51年12月	衆議院議員当選(昭和54年10月)	平成 7年 8月	参議院予算委員長(平成8年6月)
昭和55年 6月	参議院議員当選(平成14年5月まで)	平成 9年 9月	成田山奉賛会会長
昭和58年12月	大蔵政務次官	平成12年10月	参議院議長(平成14年4月まで)
昭和62年 6月	学校法人東京歯科大学監事	平成12年11月	勲一等旭日大綬章受章
平成 2年 4月	学校法人東京歯科大学評議員	平成20年 6月	桐花大綬章受章 従二位
平成 2年 6月	学校法人東京歯科大学理事		
平成 2年12月	文部大臣(平成3年11月)		

2008年 4・5月

230号

本号の主な内容

- ・法人理事長井上 裕先生ご逝去
- ・平成20年度東京歯科大学歯科衛生士専門学校入学式
- ・大学の水道橋移転について
- ・創立120周年記念事業マスコットキャラクター愛称決定
- ・平成20年度東京歯科大学入学式
- ・『井上 裕資料室』開設

弔 辞

東京歯科大学を代表して謹んで先生のご霊前にお別れの言葉を申し上げます。

先生の急逝にさいし、「人事天命」という言葉が浮かびます。先生のお好きな熟語である「得意淡然、失意泰然」はこの「人事を尽くして天命を待つ」と重なりあい、これが先生の死生観ではなかったかと拝察いたします。

「英明闊達」、「文武両道」、「懐の深さ」などご両親から受け継がれた生来の気質と、努力鍛錬をいとわない性質は、「一を挙げて三を明らかにする」先生の才知を磨き、文部大臣・参議院議長というまれに見る輝かしい政治家としてのご経歴を作られました。このご功績は世界の歯科医師の誇りでもありました。

政界を退かれてからは、母校である東京歯科大学の理事長として全霊を打ち込んでくださいました。大学の将来にとって重要な節目となる平成22年の「大学創立120周年記念事業」とその一環である「大学の水道橋移転」は、先生のこれまでの経験の集大成としてのご決断でありました。

この10年間、先生の理事長と私の大学教員という関係はもとよりゴルフ、宴席、また先生の奥様ご家族とのなかで私は先生から貴重なことを学んでまいりました。ここで感じたのは先生の「人間力」であります。人を惹きつけて止まない魅力、頼りがいのある誠実さと実行力、そして識見などの「人間力」であります。

東京歯科大学建学の精神は、血脇守之助先生によった「歯科医師である前に人間であれ」であります。井上 裕先生はこの「人間」と「経歴」が結びついた不世出の人物であり、東京歯科大学卒業生として長く歴史にその名をとどめることになりましょう。

先生が亡くなられた現実には、われわれには直ぐに受け入れ難いものであります。しかし、発展を宿命づけられている大学の使命を停滞させることは、先生のお心ではありません。

東京歯科大学 教職員一同明日をめざして互いに協力し努力してまいりますので、お導きくださいますようお願いいたします。

ここに改めて深く追悼の意を表し、御霊の安からんことと、ご家族、ご親族のご安寧を心からお祈りして、弔辞と致します。

平成20年6月28日

東京歯科大学

学 長 金 子 譲

大学の水道橋移転について

金子 譲

2010年に東京歯科大学はわが国の歯科大学・歯学部として最初の創立120周年を迎える。この記念事業の一つとして教育施設の将来検討がなされてきたが、このたび大学法人(理事長 井上 裕)によって水道橋への移転が決定された。大事業であるので教職員一同の理解と協力なくして円滑な遂行はなしえない。このためには情報共有が基本と考えるので、移転理由や将来計画を順次お伝えしたい。なお、今回記述した移転理由の骨子は、第648回法人理事会(2008年3月21日開催、第3号議案)、第217次評議員会(同3月28日開催、第4号議案)、第549回教授会(同4月15日開催)、教職員を対象とした、「東京歯科大学の将来構想に関する説明会」(同5月20日開催)で説明したものである。

1. 稲毛での大学発展

10万平米に展開されている稲毛キャンパスは、歯科大学として世界に冠たると形容されることが過言ではない規模を誇っている。水道橋からの大学移転が行われた1981年(昭和56年)は、鹿島俊雄理事長(当時)をはじめとして学校法人の英断が具現化した年であり、教職員は明日への希望に向かって歩み始めた年であった。

千葉市による東京湾千葉側の埋め立ては戦前に始まり(昭和15年、川崎製鉄敷地)、1961年(昭和36年)に稲毛海岸が、1967年(昭和42年)に検見川海岸の埋め立てが開始され、稲毛海岸は約5年後に完了している。広大な埋め立てによった壮大な新都市計画であり、幕張地区での新ビジネスパークとメッセはその象徴である。真砂の新住宅地の一角に位置するわが校舎が竣工するまでには土地取得(1973)から8年弱を要した。

1929年(昭和4年)世界大恐慌直前に血脇守之助先生が心血を注いで完成させた森山松之助博士設計の由緒ある建築物である水道橋校舎は、大学移転計画時には教育・研究そして診療におけるスペースと機能から時代に適合しえなくなっていた。1964年(昭和39年)の東京オリンピックを弾みとした日本経済の上昇は、歯科医療需要をも急増させ、歯科医師供給の必要性から1980年(昭和55年)の国立大学2校を最後として19年間で旧6校から29校・学部が増加した。わが国で最初の歯科医師医育機関である高山歯科医学院設立の1890年(明治23年)以来、この新設ラッシュは現在の歯科医師需給問題の原因となっているが、歴史的には特異な時期と映る。

しかし、一方では歯科大学・学部の増加は、歯学教育・歯科医学研究、そして大学病院に従事するマンパワーを必然的に増加させるので、各大学あるいは教員の競争と連携によって教育法の改善、研究成果の増加、地域における高度先進歯科医療の浸透といった歯科の質的向上の端緒についた時期でもある。今日の文部科学省の高等教育行政における教育・研究の競争環境を考えると、歯科医学の教育・研究における多数校によった切磋琢磨がなければ、歯科大学・学部は医学部はもとより人文系もふくめた大学間競争の土俵にさえ上がれなく、置き去りにされた集団になっていたであろうと想像される。

東京歯科大学は、稲毛校舎において学生の6年一貫教育の実施、満足いく空間と投資によった研究環境の整備、新病院による地域歯科医療の実践などによって、この約30年間で大いにそれぞれの質的向上がなされてきた。稲毛への移転によって得られた大きな成果であり、教職員が一体になって努力して成し得た結果である。

具体的には、1996年(平成8年)私立大学研究支援である「ハイテクリサーチセンター」の初年度採

択と、その後継続した現在までの7つの研究課題への支援獲得、2005年（平成17年）における2つの「教育GP」の同時採択、今年から開始した大学院における「口腔がんプロフェッショナル人材育成」などは、文部科学省の競争的支援におけるビッグプロジェクト獲得の代表的な成果である。そしてこうしたことを契機として設置された口腔科学研究センターや歯科医学教育開発センターは、研究・教育を統合的・計画的に行うことを目的とした歯科大学としては先進的な戦略機関である。

大学院の充実は、160名という多数の院生と、ほとんどが英文一流学術誌に掲載されることなどから、その研究成果の質の高さから理解されるところである。さらに、近年の歯科医師国家試験合格率の高成績は、教育成果の一面であり、また学生のオールデンタル競技会における総合成績の上位入賞も彼らの活動の一端を示すものである。

千葉病院においては、1983年度（昭和58年度）の外来患者総数は144,321、1日497.7人、1995年度（平成7年度）202,417人 1日733.4人、2007年度（平成19年度）250,071人、1日893.1人と順調に増加してきた。また、医療連携によって地域における信頼を得ながら大学病院としての役割が果たされている。

では何故都心への移転が検討され決定されたのか。この疑問が生じるのは当然であるので、その理由を述べて教職員皆さんの今後の協力をお願いしたい。

2. 将来動向

水道橋移転は稲毛移転のときと同様に将来への備えである。40年前に学校法人が予測して実行した稲毛移転は上述したように正しかった。しかし、この先の30年は大学の使命を果たす立地としては水道橋が適切であろうという計算である。その理由は、少子高齢化の進行という日本の人口構造から派生する外部要因と、それらに対応しなければならない大学の内部要因である。

東京歯科大学は、これまで創りあげてきた歴史から今後も一流の大学でなければならない。一流の大学環境の中から社会への貢献度の高い人材が多数輩出できることは、学部の違いにかかわらず同様である。知育、徳育、体育によったバランスのとれた人材が社会の指導者たり得る。稲毛で培われた力があるうちに将来に向かう整備をしようということである。

1) 外的要因

(1) 少子化と日本の経済低成長

18歳人口は、1958年（昭和33年）を頂とした数年間の第2次ベビーブームが移行して1992年度（平成4年度）には205万人、そのうち高等学校卒業生は181万人といずれも最多であったが、一昨年の2006年度にはそれぞれ133、117万人と、どちらもその65%まで急減した。そしてこれから18年後の18歳人口は昨年度の出生者の108万人まで、つまり今よりさらに20%が漸減していくこととなる。

受験生の大学全入は昨年度は避けられたが、そのような時代に突入している。したがって、優秀な人材確保のために大学は受験生に魅力あるようにすることがどこでも急務になっている。小さくなったパイでの受験生の囲い込みが激しくなっていて、人気のある医学部においてさえ学納金の減額を打ち出した私立大学が複数生じたり、1980年前後に都心から離れたマンモス大学学部のほとんどが再び戻ってきていることなどはその例である。これらは今後さらに進む少子化と二極化する大学ブランド維持への対策である。

人口変動を軸として作成される経済の長期予測では、少子化、高齢化、労働人口減少の先頭ランナーである日本経済の先行きに明るさはなにもないとされている。この現象にあわせた経済活力を失わない新しい成長モデルとして生産性向上のためには女性や高齢者の活用、外資導入が必要とされている（日本経済研究センター、長期経済予測2006-2050、<http://www.jcer.or.jp/research/long/detail3532.html>）。しかし、経済対策の一環である後期高齢者医療の新政策導入の困難さを見ても机上と市場では大

きな乖離をするので、身を切る政策の実施は容易ではなく、われわれの大学においても財務的な将来予測とその対策において同様の事態を迎えるであろう。

日本経済を国民総生産GDPで見ると、東京オリンピック（1964年）後の1965年から1990年までの35年間は急激な右肩上がりをしていて実に4.5倍となっている。東京歯科大学は1990年に創立100周年を迎え、記念事業とした水道橋ビル、市川総合病院の新築は1991年までに竣工させている。1986年から1990年にかけてのバブル景気は破綻し、その後は底知れぬデフレスパイラルを経て金融機関の多額負債が一区切りついたとされたのは数年前であり、その間のGDPの成長はほとんどないといっている。しかし、大学法人は井上 裕理事長のもと1992年度（平成4年度）に最大123億2千万円あった借入金を2007年春にはすべて返済している。

(2) 歯科大学・学部受験者の現状

春は新入生を迎え、稲毛キャンパスでは緑が萌え、大学は年間サイクルの中で最も活気が満ちている時期であるが、同時に一方では国家試験発表で沈鬱にもなるのである。17校の私立歯科大学・学部への平成20年度延べ受験者総数は7,784名で、これは日本の大学志願者数を62万人とする1.26%となる。募集定員は総計1,937名であるので倍率は4.0倍となる。しかし、複数校受験しているのが通常であるので、その倍率は低下し、私立歯科大学・学部志願者から有意な人材を選考することはどこの大学でも困難な事態になっていることは紛れもない。しかも、今年度私立歯科大学・学部受験者総数は、昨年の15%減であり、東京歯科大学は、受験日を変えたことも利してはいるが、やはり10.5%減少している。2003年（平成15年）には、東京歯科大学は一般入学試験を2期に分けたことで、応募者はその前年より一気に1.8倍になったが、その後経年的に減少し、平成20年度ではそのときの68%になっている。こうした歯科への応募者の減少曲線は、18歳人口の減少曲線よりも急峻である。

われわれに衝撃を与えたのは、今年度入学者の募集定員に大幅に満たない歯科大学が現れたことである。113名の募集に対して入学者は40名とされている。また、受験者の質低下から定員を割ってもあえて入学させなかった大学もある。さらに伝統校の一つでは、平成20年度受験生がかつてより激減したため（平成8年度より半減）、21年度からは学納金を800万引き下げた。6年後の学費収入は10億円の減収になるが、教職員給与カットと退職金減額でこの分を補うという（産経関西08・5・30）。

(3) 危惧する歯科医学・歯科医療への魅力低下

歯科医師のワーキングプア、医師・歯科医師間の収入格差、歯科医師の供給過剰問題と国家試験の難度化などが、その記事の精度は別にしてメディアを介して国民に浸透してきている感覚をわれわれは持っていた。このようなネガティブな歯科環境が受験生のみならずその保護者へ影響することを危惧していたので、その危惧は早々に受験者減少と定員割れとして現れたと考えている。投資をして回収がしづらくなれば苦勞・努力の甲斐がない業界となり、そこでは優秀な人材確保が困難なので早晩沈下していくのが道理と考える。この点から国立の歯学部入学者のレベルがもし低下しているとすれば、歯科界は大きな危機に直面していると思える。歯科大学・学部新設ラッシュ時代以来経験しなかった事態に現在直面しているとの認識である。

(4) 行政政策と大学

さて、文部科学・厚生労働行政では、前者において「国公立大学を通じた競争と連携」と「歯科大学・学部における定員削減」、後者において「医療費削減と歯科医師国家試験の難度化」が現在のキーワードである。高等教育（大学・大学院）における教育・研究への国家財政支援の柱は、重点配分方式になっている。たとえば仮に「大学院の教育改革」について応募が全国の大学院に

かけられると、すでに自身の実施している内容で申請をし、採択の可否を待つということになる。競争的資金獲得は学部を超えて互いに競争するのがほとんどで、歯学部だけに限られたプログラムは皆無である。従って大学が外部資金を獲得できることが大学の質評価に直結していて、一流の大学であるためには、競争にまず参加できる資格、つまり常に創造性と実績が教育・研究でなされている必要があり、それらが他に勝てるだけの質でなければならないこととなる。それでないと単独でも連携でも申請が不可能となる。単科歯科大学のみならず歯学部ではこの点総体的にきわめて厳しい現状となっている。つまり社会的な評価が歯学教育・歯科医学研究に対してされにくくなっていることを示している。こうした文教政策は、結果的に約500校の大学・大学院の振るい落としによる二極化を進展させているが、国家財政と教育・研究の成果とから将来的にも継続されると考える。

「連携」は、国公私立を超えて行うことになっていて、昨年募集のグローバルCOE（世界的な研究拠点）では、東北大学歯学研究科からの誘いにより東京歯科大学大学院が協力施設として申請をした。また、医師の後期研修においては慶応大学から市川総合病院での共同研修の申し出があり申請をした。この「連携」は学生の単位取得、研究、さらには学部新設、多学部との共同大学院新設など広範に広がってきている。さらには、産学連携、高大連携などともなる。直近のニュースでは、早稲田大学理工学部と筑波大学医学郡が連携をして、医学郡への途中編入によって8年間の教育期間で医学士と理工学士のダブルディグリーが取得できる制度が始まる。早稲田大学は、女子医科大学と大学院連携によって4年間でダブルドクターの取得が可能になることを意図したことも始めている。理工学の医学への積極的な参加によって、理工学によるアウトカムを医療に役立てることを目的とした新しい大掛かりな積極策である。このように「連携」は従来の枠を超えた新しいアイデアで、かつては考えられなかった連携が可能となっている。

(5) 東京の機能集中

21世紀は「知識基盤社会」であり、通信と交通の発展で、よりグローバル化が進んでいくが、このような要因のなかで東京がますます都市機能を集中化させている。水道橋は文教、医療、行政、金融、文化的な都心施設群の中にあり、その立地は日本の進展とともに有用性を高めていくだろう。

2) 内的要因

(1) 受験生確保

東京歯科大学を継承し、歯科医療・歯科医学を発展させるためには優秀な後継者育成が1にも2にも重要である。

受験生が志望校を決める要因は単純ではないが、大学の名声と質、生活費を含めた修学に必要な経費、そして立地などから総合的に決定しているのが普通であろう。既述した受験生減少から彼らにとって魅力的な大学である主要要件を可及的に満たすことが、大学にとって有意な人材確保には欠かせない。最近の本校受験生アンケート（平成20年度Ⅰ期受験者による回答）では、歯科大学・学部を志望するうえでの最も重視するポイントとして、国家試験合格率（35%）、授業内容の充実（11%）、歴史と伝統（10%）などとなっていて、立地条件は5番目であった。また、合格者の入学棄権者の理由は、国立大学歯学部、医学部、そして都心歯科大学・歯学部入学などの理由となっていて、東京歯科大学志望者では国家試験合格率が大学選択に関する牽引車の役割をしているようだ。

年間約2,500名の歯科学生が卒業するが、その約75%が私立大学生である。そして、私立歯科大学・学部学生の保護者職業は平均すると5割が歯科医師、2割が医師、3割が他の業種となっている。本校でこれらの分布に大きな差はない。都内に歯科大学・歯学部は4校あり、それらの現在の定員

は総数407名、都周辺3県には4校、504名となっている。また、都内の歯科医師数は15,331名、都周辺3県では計15,399名となっている。歯科医師は、歯科医療の楽しさ、やりがい自身の体験から知っているはずなので、そうしたポジティブな情報はその子弟に伝わりやすい。

多数の歯科志願者予備軍を有する地域と通学可能な立地との関係、より低額の教育費と大学の質など受験生・保護者に可及的に受け入れられる要因を多数保有している大学が、有意な人材確保にとって有利なはずである。

(2) 大学ミッションの高度化

歯科医師国家試験が、歯科医師の資質向上の観点から4年毎に出題形式などに改善が行われてきている。平成22年度からの試験形式は臨床実習の成果を問うことが主となるが、この改善は行き過ぎた学座勉強による受験対策を是正する目的がある。平成20年度合格率平均は68.9%であり医師国家試験の90.6%と比べると厳しい結果である。歯科医師国家試験制度改善検討部会では国家試験の難度化は歯科医師需給問題とからめないとしているが、一方では平成18年度に文部科学と厚生労働の両大臣確認によって需給問題対策として国家試験の難度化を行うと明記されている。資質向上には目標設定ができないこと、歯学生定員削減に私立歯科大学の動きがないことなどから、しばらくは国家試験の難度化と低合格率は継続すると考える。

このような状況のなかで学生は就学の目的が国家試験合格一辺倒になってはならず、若いときの感性と正義感で広く社会を観察し、考える習慣をつけなければならない。クラブ活動、友人、教師、文化的環境、奉仕活動などを通じて教養や信条・信念が育ってくる。東京歯科大学の伝統と学風によって血脇イヅムを身に着けて信頼と尊敬を得るような人物に成長するための学生生活である。人間として大切な素養なくして指導者や国際人たりえなく、国際的な活躍は歯科医師としての専門性とともに入間力が要求される。現在先導性をもって活躍しているアカデミーに属さない臨床医の3分の1が東京歯科大学の卒業生だと聞いたが、これが当を得ていれば大学教育のすばらしい成果といえる。教育は大学と学生との双方向によるので、大学は教育のあり方を常に自問し、評価しながら、なお目前のハードルを越えさせる効果的な教育方法を実施していかなければならない。学生教育における他大学・他学部との「連携」や国際交流は、学生に余力がなければできない。しかし、そうしたことは歯科学生にも早晩起きてくるだろう。

歯科大学・学部が研究を放棄すれば歯科医療の発展はなく、発展がなければ現状を維持できないので、結局自壊する。歯科では大学・大学院以外に歯科医学研究を行う施設が少ないことから、研究は大学の使命として重い。歯科医療の質は研究と教育・研修によって担保されるので、三者は常に連鎖されている。したがって大学としては相互関係を保ちながら三者によって相乗効果が生じることを目標としている。しかし、ことは容易ではない。大学は講座を主体として組織されているので、講座の業績評価・人事考課がされにくく、さらには人事権限を發揮しづらい機構となっている。石川達也前学長時代に個人評価、一部の任期制が実施され、これが基盤になって現在では全ての教員に任期制が施行されているので、運用効果が出るよう今後はさらに学内と学外周辺環境を整えなければならないと考えている。教員評価は、評価項目と評価基準が教員活動の目標であることを大学が教員に明確に伝える大きな役目をするので、医歯薬系大学ではその実績にばらつきがあるが、多くがその必要性を感じている。社団法人日本私立大学連盟医・歯・薬学部学部長会議(加入校:20校 医科13校、歯科2校 薬科9校)では平成20年3月に「医・歯・薬学分野における教員評価スタンダード・モデル」を完成させた。

講座は教育、研究が使命であり、臨床講座では診療が加わる。講座を構成しているどの教員もがこれらの使命を高いレベルでやり遂げられるとは限らない。いやむしろそれほどの優れた人材は限定された少人数であるのが実際なので、講座主任は講座員の適性を把握して、適材適所の意識をもって講座機能の向上のためにバランスよく人事管理をしなければならない。しかも、講座

に自治あって大学になしとならないように大学方針の意を汲み、大学の発展のための調和を講座が心がけないと、「競争と連携」という時代に適合しえなくなり、要は取り残された東京歯科大学となる。

したがって、大学執行部は東京歯科大学のグランドデザインを設計し、短中長期的目標設定とそのため組織体制を明確にし、これを教職員に理解してもらおう方策をとらなければならない。水道橋移転は大学のグランドデザインのハード面における中核として中期的目標と位置づけている。

(3) 財務構造改革の必要性

平成19年度決算は、帰属収入232億3,200万円、消費支出223億6,600万円であり、4億8,100万円の基本金繰り入れをした最終決算額3億8,500万円（消費収入－消費支出）の黒字が得られた。予算は1億4,300万円（帰属収入－消費支出）の赤字を組んでいたので各施設の工夫と苦勞の集積である。赤字予算の主因は、病院収支差額の減少あるいはマイナス、それとレジデント有給化と研修医制度によった人件費率の上昇であり、とくに千葉病院ではその影響が大きい。東京歯科大学の収入源は学納金18.5%、医療収入68.8%、国庫補助・助成5.6%、収益事業2.2%、寄付0.6%であり、この割合は毎年大きな変動はない。私立歯科大学・学部の平均（平成18年度）は、事業収入（医療収入含む）38.2%、学納金42.4%となっていて、両者の割合が東京歯科大学は逆転している。

医療政策と社会性に適合させた病院運営によって、それぞれ3病院が健全な収支バランスを確保することが大学財務全体の健全化に直結するということである。とくに市川総合病院医療収入は全帰属収入の半分（平成19年度52%）を占めるに至っているので、大学財務に及ぼす影響は大きい。

水道橋病院は1982年度（昭和57年度）から2007年度（平成19年度）までの差額累計は－8,440百万円となっている。水道橋病院の財務は3期に分けることが理解しやすい。大学移転後の旧館診療期（1982－1989年度）の8年間（旧館期）、新館診療開始後1990年度（平成2年度）から1997年度（平成9年度）までの8年間（新館前期）、病院財務改善を主体として運営を開始した1998年度（平成10年度）から2007年度（平成19年度）までの10年間（新館後期）とする。旧館期の差額累積は－2,068百万円で年平均－258.5百万円、新館前期では－4,323百万円で年平均－540.9百万円、そして新館後期は－2,045百万円で年平均－204.5百万円となっていて、なお問題が継続していることを表している。帰属収入はそれぞれの期の年平均で、645百万、953百万、1,629百万と新館後期には大きな伸びを示しているが総じて支出削減対策が成功していないといえる。

稲毛校舎は年齢を感じさせないほどしっかりした造りがされている。しかし、30年近く経過すると修繕や空調などの更新が必要となり、これからの5年間でそれらの総額は4,619百万円（修繕費用2,326百万円、更新費用2,293百万円）と見積もられている。また、診療用ユニット関連では1,160百万円の更新をしなければならなく、電子カルテ化も1,320百万円必要をされている。現在の耐震構造規格に合致していないこともあり、稲毛校舎での継続をするのであればその補強に5年間で1,500百万円を投入しなければならない。つまり、建築物にまつわる修繕、更新、補強で5年間に6,119百万円が支出されることとなる。しかし、こうした経費が水道橋移転を推し進める大きな要因ではない。この経費は耐震補強以外では当然生じてくるものであるし、多額出費が必要な水道橋移転よりは、財政的には稲毛にいたるのが安全である。ただし、それは直近のみの安全の確保であり、将来を保障するものではない。また、医療収入の伸び、教職員高齢化による人件費増加を主体としたシミュレーションでは、水道橋移転をしなくても、財務体質が現状維持された場合には2016年から構造的な赤字大学になると警告されている。

3. 水道橋移転決定までの経緯

本計画については、平成18年11月28日開催の創立120周年記念事業準備委員会、並びに同日開催

の第640回理事会において、記念事業の一環として「教育施設に関する将来検討委員会」が設置され、その後、千葉、水道橋校舎の将来構想について検討を重ねてきた。本計画については、本学の将来を勘案した上で重要かつ必要なことであり、教授会においても、理事会からの諮問を受け、平成20年3月11日開催の第538回全体教授会にて意見の聴取を行い、移転実施について賛同を受け、3月21日開催の第648回理事会において答申をした。

本文では基本構想（マスタープラン）について説明したい。なお、本構想は移転計画策定、計画内容の評価（収支の検討）、法令適用の面から、その実現性を検討するための前提条件として想定したものであり、法令の改正や経済動向の推移等、諸状況の変化に伴い、検討・実施を進める過程において計画内容の変更があることをあらかじめお断りしておきたい。

基本構想は大きく六つの項目に分けられる。①大学の全てを水道橋へ一斉に移転。移転する場合の選択肢としては一斉に移転を行うか、段階的に移転を行うかのいずれかとなるが、教育、研究、診療面や財務・法務の面から比較検討し、検証した結果、一斉に移転を行うことが望ましいという結論に達した。②現在の千葉校舎には、規模を縮小し、診療機能を充実させた歯科医療施設を設置、その用地分を残し、約28,500坪を売却する。大学機能を一斉に移転することから、学生や臨床研修歯科医師の教育を行う場である現在の千葉病院の機能については、大幅な見直しが必要となる。現在千葉病院は千葉県歯科医師会及び郡市歯科医師会との間で地域の歯科医療を担う医療連携ネットワークを構成しているので、その機能を十分に果たせる規模の医療機関を残す。③TDCビルを大学本体、病院として使用。現在も法人事務局及び水道橋病院として使用しているTDCビルは、6階以上のフロアを学校法人の収益事業としてテナントに賃貸している。移転後は水道橋病院にて学部学生、大学院学生、臨床研修歯科医の教育を主に実施するので、その規模、及び機能の拡張が必要となる。④三崎町二丁目パーク駐車場跡地（本学所有）を校地に変更する。平成13年に、TDCビルから神保町方面に約70メートルの場所に大学の将来構想を想定し、取得した土地があり、現在はパーク駐車場として収益事業に使用しているが、この土地に新しいビルを建築し、大学施設として利用する予定である。この建物には、血協記念ホールを改築し、コンサート会場としても使用可能な多目的ホールの建設も考える。⑤学校法人昭和一高学園との共同開発による校地確保。同校は文京区本郷一丁目に所在し、昭和4年創立の普通科、商業科を有する男女共学校である。今年創立80周年を迎え、その記念事業の一環として同校校地に共同開発で校舎を建設するパートナーを募集していた。本学と順天堂大学がその候補として名乗りを上げ、細部にわたる諸条件を含め、交渉の結果、本学が第一交渉権を得る運びとなった。現在、未契約である（6月5日現在）が、校舎建設後は、土地・建物を双方で共同所有する計画となっている。⑥グラウンドは旧市川病院跡地に設置。大学設置基準では、校舎から約1時間以内の場所にグラウンドを設置することが規定されており、同地を新しいグラウンドの第一候補として考えている。

なお、水道橋移転計画の総合的な設計は、株式会社 日本設計に委託をすることが3月開催の理事会、評議員会で承認された。同社の選定理由としては、昨年、千葉・水道橋両校舎の施設・設備に関する中長期の保全計画を策定する際、競争入札により発注先として決定された会社であり、本学での実績、サービス面、依頼業務への対応、校舎の施設・設備を充分把握している点を考慮し、同種業界においても上位の実績を有していることから業務委託先として、決定するに至った。

おわりに

大学が水道橋移転を決断するに至る大きな要因は、「東京歯科大学の将来」を実現するためである。移転計画の実施は、変化する様々な社会情勢への対処、将来的な経営に対する危機管理が必要とされる現在の本学において、時宜を得たものであり、将来構想実現の一つの大きな契機となると考えている。今回は大学の将来構想について記したい。

平成20年度東京歯科大学入学式挙行

平成20年度東京歯科大学入学式は、平成20年4月5日(土)午後1時から、金子 譲学長以下法人役員、大学役職者、教職員、父兄会及び同窓会役員、さらに新入生保護者が多数臨席する中、千葉校舎講堂において挙行された。

式は、本学管弦楽部、及び混声合唱部の部員、OBによる校歌演奏・合唱に続いて佐藤 亨学生部長の開式の辞で始まり、国歌を斉唱した後、小田 豊教務部長の呼名により新入生128名、並びに第2学年に編入となる学士編入者5名が紹介された。

次いで金子学長が訓辞を述べた後、熱田俊之助法人常務理事が井上 裕理事長の祝辞を代読された。続いて新入生代表の手島 秀君が力強く宣誓し、小田教務部長が新入生代表の金子純哉君のスーツ左襟に徽章を着装された。最後に出席者一同で校歌を斉唱し、入学式を滞りなく終了した。式後には、小田教務部長により来賓及び列

席した教員の紹介が行われた。

新入生及び学士編入者は、その後、学年・クラス毎に教養棟の各教室に分かれ、クラス主任、副主任と対面し、またお互いに自己紹介をする等、晴れて学生生活をスタートさせた。

なお、入学式に先立ち、午前10時より新入生の保護者を対象として希望制による学内見学が実施され、新入生保護者のおよそ3分の1の方々が、マルチメディア対応の第1教室、臨床基礎実習室、診察室(保存科、口腔インプラント科)、図書館(大学史料室)などの学内施設を見て回った。この見学会は本年度で数えて5回目の実施となるが、保護者にとって学生生活の一端にふれる機会にもなり好評を博していた。



全員で国歌斉唱：平成20年4月5日(土)、千葉校舎講堂



力強く宣誓する新入生代表：平成20年4月5日(土)、千葉校舎講堂



小田教務部長より徽章を着装される新入生：平成20年4月5日(土)、千葉校舎講堂



起立して学長の訓辞を聞く新入生：平成20年4月5日(土)、千葉校舎講堂

訓 辞

東京歯科大学
学 長 金 子 讓

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。また、保護者の皆さまは、お子さんが目標に向かってステップをまた一つあがったことにお喜びのことと拝察いたします。

さて、新入生の皆さんは、自分の人生の将来を職業の上からは明確に決定して、本日この入学式に臨んでいるはずであります。皆さんが入学した東京歯科大学は、歯科の専門職を育成するための高等教育機関でありますので、皆さんは、今後6年間で歯科医師になるための準備をしていくわけです。そこで、大学はどのような意思をもって皆さんの教育環境を整えているのかをお話しておきたいと思います。皆さんにこうなって欲しいという歯科医師像と、そのための育成理念を伝えておこうということです。

医師、歯科医師に限らず医療にかかわる人々の仕事の本質は、人間の健康を支えることであります。他人の健康のために働く職業であり、健康を損ねることで幸福をつかみ損なうことを皆さんが防いであげる職業であります。他人の幸せのために自らが直接役に立つという崇高な職業であります。

しかし、他人の苦しみをわが身の苦しみとも置き換えながらの治療行為などを考えますと、医療は高尚な職業とは決していえません。特に医療訴訟などの当事者になりますと、われわれは人間不信に陥るほど、どろどろの人間関係が生じる職業でもあります。

患者さんの喜びや感謝が、われわれ医療人の心に明かりを灯してくれ、明日への大きなモチベーションともなるのですが、医療の日常はそのような日向の話ばかりではありません。

したがって、皆さんは直面した苦難に負けないで乗り越えられるようになってもらいたいと考えています。あるいは、苦難を招かないように知恵が働くようになってもらいたいと考えています。このためには、何を皆さんが備えておくべきか私の考えるところを伝えておきたいと思います。

困難に遭遇したときに自分を支えてくれるのは自負、誇り、使命感、志、責任感などでもありますが、最も大切なことは好奇心とか面白さであります。これらは皆さんに持ってといて直ぐに持てる物ではありません。ですが、大学は6年間でこれらを皆さんが自然に身につくように教育したいと考えています。気がついたら身につけていたという風になれば東京歯科大学の教育は成功であると思っています。

皆さんは、今後歯科医学の専門的な知識や技術を積み上げていきます。これは、授業や実習などで大学の制度の中で行われますので、なかば強制的にさせられるともいえます。われわれの職業は無知のなかで行うわけにはいかないことは現在の皆さんでも分かるはずですが、皆さんが6年後に受験する歯科医師国家試験は歯科医業を行うに足る知識の持ち合わせを評価するに過ぎません。歯科医師国家試験は超えなければなりません、大学としての教育の目標がこの合格にあるわけではありません。それは、その時点の知識は、未来永劫ではないからです。知識は修正され、付け加えられ、あるいは否定さえもされるのが知識であります。遺伝子、再生、免疫研究の最近の進展、あるいはデジタル理論に起因した機械電子工学と医学との癒合を考えれば、皆さんが働き盛りの21世紀中期には現在想像している世界は実現している可能性が強いと考えますが、同時に人類の健康にはまた新たな問題が発生していると考えます。皆さんは新しいことにいつでも対応していかなければならないということです。

したがって、われわれは、学生に知識を教えますが、教えるべきことは知識そのものではなく、知識を身につける「手段」であります。皆さんは、生涯、歯科医療、歯科医学に身をおくのであれば、「知」の世界から生涯離れるわけにはいかないからです。医療を誠実に行うためには「学ぶ」こ

とが必須であると思う「人格の基本」と、いかにして学び、いかにして歯科医師としてより豊かな「自己を育成」するか、そしてその道筋を自分で獲得できるようにするための「行動」をいかに習慣化させるかということが、本学の教育目標であります。大学の制度の中では、前に進むために我慢とか忍耐とか必要なときが必ずありますが、そのような自己管理が、医療人として将来の明るい展開につながることを覚えておいてください。

医療は、人が人を癒すことでありますので、機械の修理とは異なって「知識と技術」だけで済む訳ではありません。患者さんは、性格、生活信条、行動様式、表現法と多様であります。歯科医師は患者さんと互いに「心」が通じなければなりません。またここでは、疾病の重篤さで患者さんへの「心」に軽重があってはなりません。そして病める者が医療に求める「心」は古来変わっておりません。また、国民の医療意識は権利意識など時代の反映でもあり、医療は法律や財政などに基づいた制度によって国家的に運営されております。したがって、医療・歯科医療は「科学技術学」であるとともに「人間学・社会学」でありますので、皆さんはこれらの学問を学び、自身の血と肉にしていくということになります。

さて、東京歯科大学は平成22年(2010年)に、創立120周年を迎えます。人間でいえば大還暦に相当するということでもあります。井上 裕理事長のご発案で2年後の5月には記念式典その他の行事を行います。皆さんにも大いに協力と参加をしてもらいますので楽しみにしておいてください。

私たち教職員、同窓は、われわれの大学が日本で最初に設立された歯科医師を育成する学校であるということを誇りにしています。それは、創立者である高山紀斎先生の新しいことに挑戦した精神がわれわれに伝わるからです。そして後を継いだ血脇守之助先生がわが国の歯科医療の土台を築き、歯科医師の権限を確立し、歯科医学校から歯科専門学校、ついには大学昇格と教育体制も発展させてきました。こうした変遷の先頭となってきたのは常に本学でありました。歯科における先導者としての先人の気概、気迫を東京歯科大学の歴史はわれわれに語りかけてくれます。このため私達は、これまでの先達の「意思」を継承し、更に発展させたいと思っております。

血脇守之助先生は学校のなかにあっては、ヒューマニズムと家族主義に徹した学校運営と教育をおこないました。とくに血脇先生は「歯科医師である前に人間であれ」と人格・教養の育成に努めることの重要性を学生に説き、この言葉が建学の精神的バックボーンとして今日に至っております。開拓精神、ヒューマニズム、人間育成が東京歯科大学の校風であり、いかに勉学で皆さんが追いまくられようと、余暇は十分にありますので、クラブ活動にも精を出し、皆さんは学生生活を成長過程の重要な一時期として積極性をもって有意義に過ごしてください。この東京歯科大学での学生時代が皆さんの持って生まれたものに磨きをかけて、指導者となり得る歯科医師の器量を作っていくことを願っております。

今年度は新入生のうち、学士入学2名を含む4名の留学生を迎えております。それぞれ台湾と韓国からであり、これからのグローバル化にふさわしい国際性の醸造環境になると思えます。どうぞ友情を育んでいただきたいと思えます。

最後になりますが、120周年記念事業の重要な柱として検討してまいりました、この稲毛の教育施設は3月末の東京歯科大学 法人理事会、評議員会で水道橋に戻ることが決定いたしました。もしかすると皆さんは高学年のある期間水道橋が学び舎となるかもしれませんので、あらかじめお伝えしておきます。

新入生の今後の健康と楽しい学生生活を祈念して訓辞といたします。

祝 辞

学校法人東京歯科大学

理事長 井 上 裕

桜花爛漫、新春のこの佳き日に、厳しい難関を突破して入学を許可された百二十八名の新入生諸君、心からお祝い申し上げます。また、五名の学士編入者の皆さん、おめでとうございます。

今日から新しい学生生活が始まります。皆さんに漢詩中庸の一節を贈ります。「人一（ひとひと）たびして之（これ）を能くすれば（よくすれば）、己之（おのれこれ）を百（ひゃく）たびし、人（ひと）十（と）たびして之（これ）を能くすれば（よくすれば）、己之（おのれこれ）を千（せん）たびす。」何事も人より百倍努力しなさい。努力を惜しまなければたとえ人より能力が劣っていても、立派な成果を上げることが出来る。ということを説いております。また、本学の建学者である血脇守之助先生は「世の中は五分の真味に二分侠気、あとの三分は茶目で暮らせよ」という言葉を残されました。人は余裕を持って、五分は真面目に取り組み、二分は男気を持って、あとの三分は無邪気に過ごしなさい。昔からよく言われることですが「よく学び、よく遊べ」のことです。

これからの六年間、学生としての節度を持ち、クラブ活動などをはじめ悔いのない青春を謳歌していただきたいと思います。同じ歯科医師を目指す六年間、一生涯付き合えるすばらしい友人・友情を育んで下さい。

保護者の皆様、改めておめでとうございます。本学で六年間お子様方をお預かりすることになりました。これも、何かのご縁ですので宜しくお願い致します。

本学は明治二十三年、国会開設と同じ年に開学し、百十八年という歴史を誇る日本最古の歯科大学であります。建学者である血脇守之助先生は「歯科医師である前に人間であれ」という人間教育を重視した「血脇イズム」を唱え、世界的な細菌学者・野口英世博士をはじめ、多くの優秀な人材を輩出しております。東京歯科大学を措いて日本の歯科医学を語ることはできません。本学の特色は、歯科のみならず、医学教育全般をカリキュラムに取り込んでおります。20診療科、570床を有する市川総合病院も千葉県の中核病院として機能しております。このように恵まれた環境と最新設備の中で学べるお子様は幸せであると思います。皆さんは今日から本学の一員となりましたので、受け持ちの先生と密に連絡を取り、どんな事でもご相談してください。

六年後には全員国家試験に合格するよう心からお祈りを申し上げ、お祝いの言葉といたします。入学おめでとう。

宣 誓

新入生代表

手 島 秀

本日ここに入学式を迎え、我々一同感激と希望に満ちあふれております。只今は、学長先生よりご懇篤なるご訓辞を賜り、伝統ある本学の誇りを胸に刻み、諸先生はじめ先輩の方々のご指導の下に勉学に励み、人格の陶冶に努め、学生の本分を尽くす事を誓います。

■法人評議員の改選

平成20年3月31日をもって本法人寄附行為第20条第2項第2号、同第3号及び同第4号に規定する評議員が任期満了を迎えるにあたり、平成20年3月21日（金）に開催した第648回理事会において下記の方々が評議員に選任された。

評議員委嘱期間は平成20年4月1日から平成23

年3月31日までの3年間となる。

今回の改選では、これまで第2号評議員をお務めいただいた奥田克爾評議員、第3号評議員をお務めいただいた坂本豊美評議員、渡邊富士夫評議員、福岡 明評議員、天野 恵評議員が任期満了により退任された。

【第1号評議員(歯科衛生士専門学校長)】(定数1名)

下野 正基

※寄附行為第20条第2項第1号に規定する評議員(東京歯科大学歯科衛生士専門学校長)は寄附行為規定役職者の任期となるため、このたびの改選には該当しない。

【第2号評議員(法人職員)】(定数10名以上)

安藤 暢敏 石井 拓男

井出 吉信 柿澤 卓

金子 讓 永井 隆夫

平井 義人 薬師寺 仁

柳澤 孝彰 【重任 9名】

高野 伸夫 【新任 1名】

【以上10名】

【第3号評議員(本学卒業者)】(定数17名以上)

浅野 薫之 岡 英男

鹿島 隆雄 川島 康

後藤 次夫 小室 甲

澁谷 國男 関 泰忠

中久喜 喬 中村 博

藤村 豊 増田 紀男

三宅 直晴 【重任13名】

青木 榮夫 上田 祥士

江里口 彰 矢崎 秀昭

吉田 昊哲 【新任 5名】

【以上18名】

【第4号評議員(学識経験者)】(定数7名以上)

熱田 俊之助 井上 裕

榊原 悠紀田郎 千葉 光行

浪貝 一良 水野 嘉夫

矢内 良幸 【重任 7名】

江崎 梅太郎 片倉 恵男

高橋 宏光 【新任 3名】

【以上10名】

■教授就任のご挨拶



微生物学講座

石原 和幸

教授会のご推挙により平成20年4月1日付で微生物学講座教授に就任いたしました。改めてその責務の重大さを感じ、身の引き締まる思いです。近年、臨床を行うのに必要なエビデンスを支える基礎医学研究の必要性は今まで以上に高くなっています。微生物学は、口腔の2大疾患である齲蝕と歯周病の病因論について、その病因である細菌を中心に解析している点で、その臨床応用としての予防処置に最も近い領域です。さらに、歯周炎と全身疾患との関係が明らかにされるにつれ、歯科医学から全身の健康へという観点からも研究の重要性が増してきています。この領域の特徴を生かし、高添先生、奥田先生のもとで培った経験を基に、質の高い基礎研究を介して歯科医学に貢献できるような仕事を行っていきたくと思っています。本学では、口腔科学研究

センターにより、共同研究が行いやすい環境が整いつつありますので、基礎研究だけでなく臨床講座の協力による臨床研究も積極的に行っていこうと思っています。教育の面では、歯科医学の進歩と共に、一般臨床を行うのに必要な知識が急速に増加し、学生に要求される知識量も急速に増加しています。これに対しては、担当の微生物学の視点から口腔感染症全体を見通せるように教育を行い、歯科医学全体を見渡せるような大きな視野をもてる力を培う礎を作っていきたいと思っています。これにより将来東京歯科大学から日本の歯科医療の明日を拓いていくことのできる人材を出していくことの助一になればと思っていますので、皆様方のご指導、ご鞭撻を戴きたいと存じます。

略歴

昭和60年 3月 東京歯科大学卒業
 昭和60年 4月 東京歯科大学大学院歯学研究科入学(微生物学専攻)
 昭和60年 5月 第77回歯科医師国家試験合格
 昭和60年 7月 歯科医籍登録 第97377号
 平成元年 3月 東京歯科大学大学院歯学研究科修了(微生物学専攻)
 平成元年 3月 歯学博士の学位受領(東京歯科大学)
 平成元年 4月 東京歯科大学微生物学講座 助手

平成 4年 2月 Texas大学San Antonio Health Science Centerに留学
 平成 5年 7月 New York州立大学Buffalo校に留学
 平成 6年 4月 東京歯科大学微生物学講座 講師
 平成 9年10月 第9回歯科基礎医学会賞（微生物学部門）受賞
 平成12年 5月 平成11年度日本細菌学会黒屋奨学賞受賞
 平成14年 4月 東京歯科大学微生物学講座 助教授
 平成14年 4月 東京歯科大学第108期生副主任
 平成16年 6月 学生副部長

平成17年11月 第13回 土屋文化振興会助成金受賞
 平成18年 3月 平成18年度日本ワックスマン財団助成金受賞
 平成19年 4月 東京歯科大学微生物学講座 准教授
 平成19年 6月 共有機器管理部長、アイソトープ安全委員会委員長、アイソトープ研究施設管理部長
 平成19年10月 2007年度 日本歯周病学会学術賞受賞
 平成20年 4月 東京歯科大学微生物学講座 教授



歯科理工学講座
(口腔科学研究センター兼務)
 吉 成 正 雄

このたび教授会のご推挙により、平成20年4月1日付をもちまして歯科理工学講座教授（口腔科学研究センターコア研究部口腔インプラント学研究部門主任教授と併任）を拝命いたしました。本学における最初の口腔科学研究センター主任教授の重責を担うことは、身に余る光栄でありますとともに、責任の重大さを痛感しております。

「口腔インプラント治療」は、予知性の高い治療方針として21世紀の歯科医療の一つの核をなすものと認識されつつありますが、現在の「口腔インプラント学」は臨床が先行し、EBMに基づいた学問体系が確立しているとはいえません。この情況に鑑み、エビデンスのあるデータを蓄積し、その成果を臨床現場へ還元することにより、産・官・学と臨床が一体となったインプラント医療技術の標準化、検査・診断法の確立、新規材料の開発、などを推進することが求められています。また、「口腔インプラント学」の卒前・卒後教育の体系化も重要な課題となっています。幸いなことに、本学における口腔インプラント研究・教育は、質量共に他大学を凌駕する優れた成果があり、本研究を遂行する素地は充分にあります。また、本学は千葉病院、水道橋病院、市川総合病院を有し、インプラント研究の多くの臨床データを蓄積することができます。これら本学の優れた環境を活用

することにより、口腔インプラント学研究を遂行し、大学の研究拠点形成の礎を築くとともに、できれば東歯型インプラント・術式を開発したいと考えております。また、若手研究者は「人材→人材」であるとの認識のもと、国際的に活躍できる若手研究者を育成することも責務であると認識しております。

歯科理工学と口腔科学研究センターの併任ではございますが、歯科理工学講座の小田 豊教授のご理解を得て、軸足は口腔科学研究センター口腔インプラント学研究部門に置き、上記目標を達成すべく、口腔インプラント学研究・教育に邁進する覚悟ですので、今までも増してのご指導ご鞭撻を宜しくお願い申し上げます。

略歴

昭和43年 3月 茨城県立水戸第一高等学校卒業
 昭和47年 3月 茨城大学工学部電子工学科卒業
 昭和49年 4月 東京歯科大学歯科理工学講座 助手
 昭和55年 4月 東京歯科大学歯科理工学講座 講師
 昭和61年 4月 歯学博士の学位受領（東京歯科大学）
 昭和63年10月 昭和63年度東京歯科大学学長奨励研究賞
 平成元年 3月 日本歯科理工学会和文誌編集委員会委員（平成12年3月まで）
 平成 2年12月 学命によりタイ王国チェンマイ大学研究指導
 平成 4年 7月 学命によりスウェーデン王国ルンド大学留学
 平成 9年 6月 日本歯科医師会ISO/TC194歯科対策委員会委員
 平成10年 1月 東京歯科大学歯科理工学講座 助教授
 平成10年 1月 東京歯科大学学会評議員（現在）
 平成10年 6月 経済産業省インプラント材料の試験方法関係JIS原案作成委員会委員
 平成13年 6月 東京歯科大学口腔科学研究センター分析生物学研究機器主任

平成14年 4月	日本歯科材料協議会ISO/TC194/SC8 (インプラント) 歯科対策委員会委員	平成19年 5月	第48回日本歯科理工学会学術講演会 発表優秀賞
平成14年 4月	歯科チタン学会評議員 (現在)	平成19年 4月	東京歯科大学歯科理工学講座 准教授 (職名変更)
平成14年 4月	日本バイオマテリアル学会評議員 (現在)	平成19年 9月	日本再生歯科医学会評議員 (現在)
平成15年 1月	日本口腔インプラント学会認定制度による基礎系指導者 (第5号)	平成20年 4月	平成19年度日本歯科理工学会論文賞 (Dental Materials Journal)
平成15年 8月	日本歯科理工学会認定制度による Dental Materials Senior Adviser (第53号)	平成20年 9月	日本歯科理工学会評議員 (現在)
平成19年 4月	日本口腔インプラント学会編集委員 (現在)	平成20年 4月	東京歯科大学口腔科学研究センター・歯科理工学講座 (併任) 教授



小児歯科学講座

新谷 誠 康

このたび、教授会のご推挙により、平成20年4月1日付けをもちまして小児歯科学講座主任教授に就任致しました。伝統と実績を誇る東京歯科大学の教授を拝命致しましたことは身に余る光栄であり、重責を与えられたことに、身の引き締まる思いです。今後は、さらに教育、臨床、研究に研鑽を積み、職務に取り組んでまいりたいと思います。

日本が少子高齢化社会へと踏み込んだ現在は、親が少ない子により上質な歯科的健康管理をと望む時代でもあります。ゆえに、小児歯科医の手腕に期待が寄せられる機会はこれから増加していくものと考えられます。さらに、小児歯科医が持つ、子どもとコミュニケーションし、安心感を与える技術は、診療の対象が小児であっても成人であっても、これからの歯科医に必要な欠くべからざるものであります。これらの能力の習得には、相手の気持ちを思う人間性や倫理性が問われます。私は知識や技術はもちろんのこと、学生や若い歯科医師の患者さんへのマネージメント能力の向上にも力を注ぎたいと思っております。

私はこれまで基礎講座あるいは海外の大学との共同研究を積極的に行って参りました。研究に関して強く大学に要求されることは、取り組む研究が客観的な評価に耐えうるかどうかです。

インパクトの高い研究には、臨床医の目で見た詳細な病態観察と基礎研究者の手による緻密な基盤の研究の連携が必要です。私は小児歯科独自の研究もさることながら、これまで本講座が進めてきた基礎講座との関係をさらに密にしつつ、他大学研究機関や海外にも共同研究の輪を広げ、病態と予防の核心に迫るプロジェクトを進めてゆきたく考えております。

皆様には今後も小児歯科学講座にお力添えを宜しくお願い致します。

略歴

昭和63年 3月	大阪大学歯学部卒業
昭和63年 4月	第81回歯科医師国家試験合格
平成 4年 3月	大阪大学大学院博士課程歯学研究科臨床系専攻 修了 博士 (歯学) の学位授与 (大阪大学)
平成 4年 4月	大阪大学歯学部附属病院 医員
平成 5年10月	日本小児歯科学会 認定医
平成 7年 4月	大阪大学歯学部附属病院 助手
平成10年 1月	マックス-プランク生物学研究所免疫遺伝部門 ポストドクトラル・フェロー (テュービンゲン市、ドイツ連邦共和国)
平成12年 4月	大阪大学大学院歯学研究科 助手
平成14年11月	大阪大学大学院歯学研究科 助教授
平成15年 5月	日本小児歯科学会 認定医指導医
平成16年 9月	有限責任中間法人日本小児歯科学会 専門医指導医
平成19年 4月	大阪大学大学院歯学研究科 准教授
平成20年 4月	東京歯科大学小児歯科学講座 教授

■准教授就任のご挨拶



千葉病院
総合診療科

高橋 俊之

この度、教授会のご推挙により平成20年4月1日付をもちまして、千葉病院総合診療科准教授を拝命いたしました。身に余る光栄であるとともに責任の重さを感じております。

私は昭和54年東京歯科大学を卒業後、歯科補綴学第二講座（現クラウンブリッジ補綴学講座）に所属し、故羽賀道夫教授、腰原 好名誉教授、佐藤 亨教授のもと、歯科補綴学、インプラント学を主に学んで参りましたが、平成17年4より総合診療科兼任、平成18年4月より総合診療科専任となりました。平成18年4月千葉病院研修管理委員会委員、同年8月研修委員会副委員長となり、今日まで3年間歯科医歯臨床研修に携わって参りました。

千葉病院総合診療科は、平成14年に開設された新しい診療科であります。現在、総合診療科科長・研修委員会委員長角田正健教授のもと、専任教員7名、兼任教員5名、臨床専門専修科生4名、歯科衛生士4名で歯科医師臨床研修、診療、研究、学生教育を行っております。歯科医師臨床研修は平成18年から必修化となり、歯科医師国家試験合格後1年間の臨床研修が義務化され、千葉病院には毎年90名程の研修歯科医が在籍いたします。全員の研修を無事終了させることが、私どもの大きな使命であります。歯科医師臨床研修も本年で3年目を迎えますが、既に幾つかの問題が出てきております。今後、それらの問題を改善するとともに、より良い歯科医師臨床研修が行える環境を構築すべく努力する所存です。また、学生教育におきましても、「一口腔一単位」の教育の一翼を担うべく、5年生の臨床実習教育の準備も進めております。

以上、現状と抱負を述べさせていただきましたが、皆様のご協力なくしては総合診療科の発展はありません。今後ともご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。



千葉病院
内科

大久保 剛

平成20年4月1日付けで、内科科長に就任いたしました。どうぞよろしくお願いいたします。まずは簡単に自己紹介をさせていただきます。昭和55年順天堂大学医学部を卒業し、同大学外科学教室に入局いたしました。2年間の研修医を終了し、当時は第一外科という、消化器外科を中心に診療する教室に入局しました。現在は上部消化管外科と、下部消化管外科の二つの教室に分かれています。以後、臨床研修はもちろんのこと、研究面では「ストレスと胃粘膜障害」

というテーマをいただき、ラットを用いた実験潰瘍の仕事をしました。胃粘液量の測定を目的として、北里大学生化学教室へ出向させていただき、何とか昭和63年に学位を取得することができました。その後は、大学での研修と関連病院への出張研修を何回か繰り返し、平成6年、埼玉県川口市にあります、済生会川口総合病院に外科常勤医として就職いたしました。同病院は、いわゆる地域中核病院で、二次救急も扱う大変忙しい病院です。手術を中心の臨床主体で、本年3月まで14年間、同病院に勤務いたしました。

このたびは、ご縁ありまして歴史と伝統のある東京歯科大学の教職員としてご採用いただきました。身に余る光栄と同時に、責任の重さをひしひしと感じています。まずは本校の学生と職員の皆様の健康管理が、私に課せられた使命と考えております。健康上の不安や悩みがござ

いましたら、どうぞ気軽にご相談下さい。とはいえ、まだ新しい環境に慣れず、わからないこ

とも多く、戸惑う毎日です。どうか皆様のご指導、ご鞭撻をお願いいたします。



市川総合病院

リハビリテーション科

新井 健

この度、2008年4月1日付けで伝統ある東京歯科大学の市川総合病院リハビリテーション科准教授を拝命し、たいへん光栄に思うとともに、高齢化社会の到来とともに、廃用症候群の阻止、早期の社会復帰などリハビリテーションの社会的な重要性が高まる中、その重責に身の引き締まる思いです。私は、昭和60年に慶應大学整形外科の医局に入局し、これまで手の外科や末梢神経の外科を中心に、一般整形外科、外傷、関節疾患の診療および研究を行ってきましたが、整形外科の通常の診療および術前・術後のリハビリ、小児リハビリテーション施設勤務、あるいは、前職の独立行政法人国立病院機構村山医療センターにおける、脊髄損傷の患者さんの管

理やリハビリテーション、褥瘡の予防や治療などを通してリハビリテーション医学に関わってきました。本学におきましては、電気診断学、神経筋の生理学、運動生理学、物理療法、リハビリテーション工学などを科学的基礎とし社会復帰を援助する医学分野であるとの観点から、咀嚼・嚥下障害や顎関節障害等に対するリハビリテーション医学の科学的評価および適応につき学んでいただけるよう努力する所存です。また、整形外科、脳血管障害領域などのリハビリテーション医学の考え方についても紹介したいと考えています。研究につきましては、これまで、末梢神経の再生や側副発芽などの研究を行ってきましたが、今後も継続するとともに歯科領域への応用を検討して行きたいと考えています。臨床面では、早期社会復帰の観点から、診療各科および院外の関連医療施設と連携を密に行い、急性期病院のリハビリとしての役割を果たしていきたいと考えます。手の外科専門医としても、地域の基幹病院としての役割を果たしてゆきたいと考えていますのでよろしくお願い致します。

学内ニュース

■博士(歯学)学位記授与

○第573回 平成20年4月9日(水)授与

第548回 (H18.2.15) 合格

塩崎 秀弥(麻酔) 第1667号・甲963号

第560回 (H19.3.14) 合格

田中 志歩(臨検) 第1733号・甲1014号

第569回 (H20.1.16) 合格

本田 敦郎(解剖) 第1754号・甲1029号

○第574回 平成20年5月14日(水)授与

第569回 (H20.1.16) 合格

岩沼 治(解剖) 第1785号・甲1060号

■平成20年度教育職員辞令交付式

平成20年度教育職員辞令交付式が、4月1日(火)

午前10時より千葉校舎第1会議室において挙行された。

今年度の教育職員辞令交付式は、4月1日付発令の任命(1名)、採用(26名)・再任(5名)・昇任(9名)・配置替(3名)の助手以上の教育職員44名が千葉校舎に集合し、薬師寺仁副学長、井出吉信副学長、石井拓男千葉病院長、平井義人法人主事、永井隆夫事務局長がご臨席され、菅沼弘春大学庶務課長の司会により、金子讓学長より44名に辞令が交付された。

辞令交付終了後、金子学長から本学の教育職員として、グローバルな視点で自分自身を高めることに努力願いたい旨の訓辞があった。引き続き、平井法人主事からは、学校法人の運営に

携わっている立場から服務・規律等の遵守を交えたご挨拶が述べられた。

午前10時30分からは、同会場において4月1日付発令のリサーチレジデントの採用(1名)、ポストドクトラル・フェローの採用(1名)・更新(2名)、リサーチ・アシスタントの採用(4名)・更新(2名)とティーチング・アシスタントの採用(19名)・更新(6名)辞令が薬師寺副学長から交付され、午前11時に辞令交付式が滞りなく終了した。



金子学長の訓辞を熱心に聞く出席者：平成20年4月1日(火)、千葉校舎第1会議室

■平成20年度千葉病院レジデント辞令交付式

平成20年4月1日(火)午前9時より千葉校舎第2教室において、平成20年度千葉病院レジデント辞令交付式が行われた。式は中川寛千葉病院副院長の開式の辞より始まり、石井拓男千葉病院長による訓辞、続いて新任レジデントおよび継続レジデント全員に辞令が交付され、無事に式は終了した。また、市川総合病院、水道橋病院のレジデントにもそれぞれの病院にて辞令が交付された。

※レジデントの氏名は、人事その他欄に掲載



石井千葉病院長より辞令を受ける石川レジデント：平成20年4月1日(火)、千葉校舎第2教室

■平成20年度 歯科臨床研修開始式

平成20年4月1日(火)午後1時30分より、千葉校舎歯科臨床研修医室において、千葉病院にて研修を行う92名の臨床研修歯科医ならびに関係者出席のもと、平成20年度歯科臨床研修開始式が行われた。式は高橋俊之臨床研修副委員長の開式の辞に始まり、石井拓男千葉病院長より研修歯科医を代表して石井百子研修歯科医に辞令が交付された。その後、石井千葉病院長による訓辞、角田正健臨床研修委員長の挨拶が行われ、式は無事終了した。

市川総合病院では、医科と歯科の合同による臨床研修開始式が、平成20年4月3日(木)午前9時から市川総合病院の講堂で開催された。当日は、辞令交付により始まり、安藤暢敏市川総合病院院長、西田次郎研修管理委員長、山根源之歯科研修管理委員長、森下鉄夫市川総合病院副院長、外木守雄歯科研修管理副委員長並びに新任の濱野孝子看護部長からの挨拶で閉会した。引き続き、保険医療、処方仕方の仕方、医師賠償責任保険等についての講習が行われ、昼食後には院内見学が行われた。



千葉病院歯科臨床研修開始式：平成20年4月1日(火)、千葉校舎歯科臨床研修医室



訓辞を受ける臨床研修歯科医：平成20年4月1日(火)、水道橋病院第1・2会議室

水道橋病院では、歯科医師臨床研修開始式が、平成20年4月1日(火)午前9時より、水道橋校舎第1・2会議室において行われた。古澤成博水道橋病院教育主任の開式の辞に始まり、古澤教育主任により臨床研修歯科医14名が紹介され、柿澤卓水道橋病院長より辞令が交付された。続いて、柿澤水道橋病院長より訓辞があり、開始式は終了した。

■平成20年度新生・学士編入者オリエンテーション実施

平成20年度新生、及び学士編入者を対象としたオリエンテーションが、平成20年4月7日(月)午前9時から教養棟第5教室において行われた。

まず、学生生活に関する事項として、井出吉信副学長より「学生生活の心構え」について、教務部の立場から小田豊教務部長、教養の立場から橋本正次教養科目協議会幹事よりそれぞれ説明が行われた。次いで学務関係について、望月隆二教務副部長より教養系学科の教科概要、河田英司教務副部長より基礎系学科の教科概要、柴原孝彦教務副部長より臨床系学科の教科概要、佐野司教務副部長より共用試験について、石井拓男千葉病院長より千葉病院の概要について説明が行われた。

午後は、学生部の立場から佐藤亨学生部長、大久保剛准教授(千葉病院内科)より学生生活における健康管理についての説明があり、引き続き、事務関係の説明の後、千葉校舎及び千葉病

院の施設を見学し、午後4時に終了した。



真剣な表情で話を聞く新入生：平成20年4月7日（月）、教養棟第5教室

■新入生水道橋校舎・病院、市川総合病院見学

新入生オリエンテーションの一環として、平成20年4月8日（火）に東京歯科大学水道橋校舎・病院並びに市川総合病院の見学が実施された。

新入生は、午前9時50分に水道橋校舎（TDCビル）2階血脇記念ホールに集合し、古澤成博水道橋病院教育主任の進行で、柿澤卓水道橋病院長の挨拶、古澤教育主任から水道橋病院スタッフの紹介、榎石武美水道橋病院副院長から水道橋校舎の施設並びに水道橋病院の診療システム等に関する説明を受けた後、約45分間で院内を見学した。

新入生は引き続き、市川総合病院2階講堂に移動し、午後2時から山根源之市川総合病院副院長の進行で、安藤暢敏市川総合病院長より挨拶及び診療科の紹介、各科部長より教育概要の説明を受けた後、病院施設を約1時間にわたり見学した。

■平成20年度大学院歯学研究科入学式

平成20年4月10日（木）午前10時から千葉校舎第1会議室において、平成20年度東京歯科大学大学院歯学研究科入学式が挙行された。川口充大学院教務部長の開式の辞に続き、新入生代表松岡海地君に金子讓学長から入学許可証が授与された。続いて金子学長の訓辞、柳澤孝彰大学院研究科長の挨拶の後、新入生を代表して松岡君が宣誓し、入学式を終了した。なお、入学式に引き続き一期会賞の授賞式が行われ、一期会西山巖会長より松岡君に表彰盾と金一封が贈呈された。



新入生代表で宣誓をする松岡君：平成20年4月10日（木）、千葉校舎第1会議室

■大学院オリエンテーション「研究施設説明会」開催

平成20年4月10日（木）午後1時から千葉校舎第1会議室において、本年度の大学院新入生を対象にオリエンテーション（研究施設説明会）が開催された。

説明会は、柳澤孝彰大学院研究科長の挨拶の後、TDC-Netの活用について河田英司情報システム管理委員長、図書館の文献検索について山田了図書館長、実験動物施設について田崎雅和実験動物施設管理部長、アイソトープ研究について佐藤裕アイソトープ研究室主任、研究機器管理部の概要について石原和幸研究機器管理部長、大学院共通講義について川口充大学院教務部長、学外総合セミナーのプレゼンテーションについて柳澤大学院研究科長から、それぞれ説明が行われた。



オリエンテーション風景：平成20年4月10日（木）、千葉校舎第1会議室

■第7回水道橋病院症例報告会開催

平成20年4月10日（木）午後4時より、水道橋校舎血脇記念ホールにて第7回水道橋病院症例報

告会が開催された。この会は、紹介医の先生方との密接な病診連携をはかり、日常取り組んでいる臨床についての相互理解を深めるため毎年開催しているものである。

会の冒頭で柿澤 卓水道橋病院長より挨拶があり、引き続き、「ビスホスホネート系薬剤投与患者の歯科治療」(齋藤 淳講師 (総合歯科))、「経口ビスホスホネートによると考えられる顎骨壊死の1例」(高久勇一朗助教 (口腔外科))、「インプラント治療希望で来院したビスホスホネート製剤服用症例」(田口達夫助教 (口腔インプラント科))、「インプラントの過去から現在への変化とその特性」(松崎文頼レジデント (口腔インプラント科))の4題の症例報告があった。また、今回は特別講演として佐野 司教授 (歯科放射線学講座)をお迎えし、「エックス線診断の最前線」と題したご講演をいただいた。各講演・発表とも、約200名を超える参加者との活発な質疑応答が行われた。同時に、ホールのロビーでは、各科によるポスター11点の展示・発表も行われ、盛会のうちに終了した。



講演する佐野教授：平成20年4月10日(木)、水道橋校舎血脇記念ホール

■平成20年度新入生学外セミナー開催

平成20年度新入生学外セミナーが4月16日(水)から4月18日(金)までの2泊3日の日程で、木更津市の「かずさアカデミアパーク」で行われた。

本セミナーは「歯科大学1年生としての学習の心構え」、「How to learn, how to study」、「新入生同志の親睦」の3点を目的として行われ、今回で11回目を迎えた。

新入生は、16日午前9時に千葉校舎に集合し、午前9時30分に出発。午前11時より開講式が行われ、引き続き11時20分から金子 讓学長によるセ

ミナー講演が行われた。

昼食後、午後1時より、永洞耕平千葉西警察署副署長の講演があり、午後1時50分からは望月隆二教務副部長によるコンセンサス・ゲームが行われ、午後3時30分から1回目のグループ討議に入った。グループ討議は、新入生を13のグループに分け、今年から行われたディベートについて討議された。午後6時30分からは、テーブルマナー講習会を兼ねた夕食会があり、ホテルマンよりフォーク、ナイフの使い方など細かなマナーについて説明があった。マナーに興味を持っている新入生が多く、先生方と親睦を深めながらも熱心に説明を聞いていた。

2日目の17日(木)は、午前9時から河田英司教務副部長によるself-learningの重要性(コンピュータスキル)について講演があり、新入生は実際にパソコンを操作しながら学んでいた。続いて、お昼をはさんで2回目・3回目のグループ討議があり、午後4時30分から西田次郎消化器科教授より「身体と心の健康管理」と題した講演、午後5時20分からは外木徳子先生より「臨床医から新入生へのメッセージ(歯科医療の現場から)」と題した講演があった。続いて、午後6時30分からは懇親会が行われ、中村光博学生副部長による校歌の練習、ビンゴゲームなどを通じて大いに盛り上がり、親睦が深まった。その後、十分にリフレッシュした新入生たちは、翌日のグループ発表に向け自主的に準備に取り組んでいた。

最終日の18日(金)は、午前9時から各グループによる「公開ディベート」が行われた。今回は各グループが「肯定派」と「否定派」に分かれ、グループ毎に論理的・否定的な考えによる意見が出され、中には視聴者を感心させる発言をする学生もいて、



井出副学長の話熱心に聞く新入生：平成20年4月16日(水)、かずさアカデミアパーク

会場は非常に盛り上がった。また、質疑応答も活発に行われ、充実した「公開ディベート」となった。

最後に橋本正次教養科目協議会幹事による閉講の辞により幕が閉まり、3日間に亘るセミナーを終了した。帰路は、悪天候ではあったが東京湾アクアライン・海ほたるを経由し、午後3時30分、全員無事に大学へ到着した。



グループ討議にも精一杯取り組んだ：平成20年4月17日（木）、かずさアカデミアパーク

■第73回歯科医学教育セミナー開催

平成20年4月21日（月）午後6時より千葉校舎第2教室において、第73回歯科医学教育セミナーが開催された。今回は、「新年度の教育体制について」と題し、井出吉信副学長、小田 豊教務部長より説明が行われた。

まずはじめに、井出副学長より平成20年度入学試験の結果について、推薦入学選考（公募制、指定校制）、一般入学試験（Ⅰ期、Ⅱ期）それぞれの概要について説明された。指定校制については20年度入試で3度目となるが、指定校制入学者の成績状況等を精査し、指定高校については吟味を行い今後も実施していく旨説明があった。また、一般入学試験（Ⅰ期）においては、今年度より日程を2月2日（土）とし、千葉校舎、大阪会場の2会場にて試験を実施した。入学試験については、平成20年度の結果を慎重に精査し、今後対策を立てていくことが必要である旨説明があった。そして、平成19年度歯科医師国家試験結果については、前年に引き続き全国平均を大幅に上回り好結果を得たが、国家試験の難度化、6年生の留年者の対応等、重点的に対策を立てるべき事項もあり、また、他大学との差も縮まってきたことから、登院実習の方法等について今年度は更に工夫して差別化を図っていく必要

がある旨説明がなされた。

次に、小田教務部長より平成20年度の教務関係事項について、カリキュラムにおける変更点及び重点的に取り組むべき事項、試験の受験資格に係わる出欠に関する注意事項等について説明がなされた。また、試験、成績におけるセキュリティの確保の問題及び科目試験等問題の質の向上、共用試験CBTの状況、授業評価、授業における著作物の取り扱いについて、Webシラバスの今年度の変更点等について説明され、教育に携わる教員はこれらの点に熟知した上で学生指導にあたってもらいたい旨の説明がなされた。

当日は170名近い参加者が集まり、新年度の教育体制について皆熱心に耳を傾けていた。



説明する井出副学長：平成20年4月21日（月）、千葉校舎第2教室

■大学院春期ベーシックセミナー開催

平成20年度大学院春期ベーシックセミナーが、平成20年4月21日（月）、23日（水）～25日（金）、5月7日（水）、8日（木）に開催された。このベーシックセミナーは、主に大学院1、2年次生を対象とし、基本的な研究機器の使用法の修得を目的として、研究機器管理部や関連講座の協力を得て



研究機器について説明を受ける受講者：平成20年4月21日（月）、細胞形態学研究室

平成12年度より開催されているセミナーである。細胞形態学、分子生物学、細胞生物学、分析生物学、生体素材学および保険情報学の研究機器の使用に関しレクチャーを受けた。研究生活をスタートさせたばかりの大学院生にとって、実際にどんな研究機器があり、自分の研究にどう活用できるのかを体験した貴重なセミナーとなった。

■吉成正雄教授 日本歯科理工学会論文賞を受賞

平成20年4月26、27日に開催された第51回日本歯科理工学会学術講演会（鶴見大学記念館・神奈川）での総会において、歯科理工学講座（口腔科学研究センター・口腔インプラント学部門・主任）吉成正雄教授が日本歯科理工学会論文賞を受賞した。論文賞は、日本歯科理工学会が発刊している英文誌・Dental Materials Journalおよび和文誌・歯科材料・器械に平成19年度に掲載された論文（英文誌：127編、和文誌20）の中で新規性、独創性があり、将来の発展に貢献が期待できる学術論文に贈られる賞で、今年度は英文誌より6編、和文誌より1編が受賞した。

受賞論文は”Controlled Release of Simvastatin Acid Using Cyclodextrin Inclusion System”（M. Yoshinari, K. Matsuzaka, S. Hashimoto, K. Ishihara, T. Inoue, Y. Oda, T. Ide, T. Tanaka, Vol. 26, No. 3, p. 451-456）で、骨芽細胞においてBMP-2を産生し骨形成を促進するシンバスタチンをシクロデキストリンに包接し、材料に固定化することで、体内において材料からの徐放を制御することを目的とした論文である。これまでの研究では、BMP-2を直接チタン板状に固定化するとその活性が失われ、所望の骨形成効果が得られていなかったが、本論文はシンバスタチンをシクロデ

キストリンに包接することで、材料上に固定化でき、かつ結晶性やpHを制御して徐放ができる薬物送達システム（DDS）として応用が可能になることを明らかにした。本手法は、コストや抗原性など様々な問題を有するBMP-2を直接利用することなくインプラント周囲の骨量を改善することが期待でき、歯科臨床への応用が強く熱望される。また、本論文は東京歯科大学・口腔科学研究センター（HRC7）で得られた成果であり、東京歯科大学の研究のクオリティーの高さを示したといえる。

■武本真治講師 日本歯科理工学会IADR-DMGC-J記念賞受賞

平成20年4月26、27日に開催された第51回日本歯科理工学会学術講演会（鶴見大学記念館・神奈川）での総会において、歯科理工学講座に武本真治講師がIADR-DMGC-J記念賞を受賞した。本記念賞は海外で開催された歯科理工学関係の学術講演会における発表で、新規性、独創性があり、将来の発展に貢献が期待でき、国際的な評価が得られる内容であることが選考の対象となっている。武本講師は、2007年3月に米国・Louisiana州・New Orleansで開催されたThe 85th general session & exhibition of the IADR/AADR/CADRにて発表した”Electrochemical Behavior of Titanium in Fluoride and Hydrogen Peroxide Solutions”（S. Takemoto, M. Hattori, M. Yoshinari, E. Kawada, Y. Oda）が受賞の対象となった。

受賞対象となった研究内容は、齲蝕予防剤に含まれているフッ化物と義歯洗浄剤に含まれる過酸化剤に対する純チタンの耐食性を電気化学的腐食挙動から検討し、それぞれのフッ化物お



総会後、懇親会で中嶋 裕日本歯科理工学会会長と一緒に（右が吉成教授）：平成20年4月26日（土）、鶴見大学記念館



総会後、懇親会で中嶋 裕日本歯科理工学会会長と一緒に（左が武本講師）：平成20年4月26日（土）、鶴見大学記念館

よび過酸化物によって腐食挙動が異なることを明示し、説明した研究である。歯科臨床でも純チタンの変色・腐食が話題に挙がっていることを反映して、フッ化物および過酸化物による機序が異なることは注目されている。これらの結果から、フッ化物および過酸化物に対して優れた耐食性を有する新規チタン合金を設計することが、今後歯科臨床への応用を広げるものと期待される。

■河野 敬大学院生 発表優秀賞を受賞

平成20年4月26、27日に開催された第51回日本歯科理工学会学術講演会（鶴見大学記念館・神奈川）で歯科理工学講座河野 敬大学院生が発表優秀賞を受賞した。本発表優秀賞は、発表内容に新規性があり、プレゼンテーションが明瞭かつ優れている発表に贈られる賞で、昨春開催された第49回日本歯科理工学会学術講演会（札幌コンベンションセンター・札幌）の“ファイバーポストを用いた歯根—ポスト複合体の力学的検討”と題して発表されたもので、口頭発表36演題の中から3演題に授与された。

受賞対象となった研究内容は、根管治療後の残存歯質と既製ファイバーポストを接着させることを想定し、既製ファイバーポストの容積占有率が歯根—ポスト複合体の力学的特性におよぼす影響について明らかにすることを目的として行われた。その手法として、既製ファイバーポストとそれを覆うコンポジットレジンとの複合ポストおよび歯根に複合ポストを接着させた歯根—ポスト複合体について、ダイアメトラル引張特性について検討した。その結果、既製のファイバーポストの応用は、ポスト複合体とし



中島 裕日本歯科理工学会会長から賞状受ける河野敬大学院生：平成20年4月26日（土）、鶴見大学記念館・大学食堂

ては曲げ強さが大きくなり強化されるが、ダイアメトラル引張強さは小さくなることを示した。つまり、歯根—ポスト複合体の機械的性質は応力の方向に左右されることを明らかにした。本研究は、普及しつつある既製ファイバーポストを用いた支台築造について、その特性を明らかにしたものとして高く評価された。

■第22回カリキュラム研修ワークショップ開催

平成20年5月2日（金）、千葉校舎実習講義室Ⅲ、Ⅳにおいて、第22回カリキュラム研修ワークショップが開催された。歯科医学教育が大きく変革している現在の状況下で、学生教育におけるTA（Teaching Assistant）の果たす役割が大きく重要であることから、今回は、TA32名の他、本務教員1名を対象とし実施した。カリキュラム・プランニングに関する6つのセッションからなるプログラムが実施された。5グループに分かれ、限られた時間内に討議、発表を行う凝縮された内容のワークショップに参加した受講者からは、「教育を行ううえで必要な知識を学ぶことが出来た」「チューターとして授業に参加するにあたり、今まで以上に的確に学生指導を行えるようにしたい」等の感想が挙げられた。最後に、受講者に修了証書が授与され終了した。本ワークショップを今後も継続して実施することにより教育体制の改革と教育指導のより一層の充実を目指している。



グループ討議風景：平成20年5月2日（金）、実習講義室Ⅳ

■第74回歯科医学教育セミナー開催

平成20年5月12日（月）午後6時より千葉校舎第2教室において、第74回歯科医学教育セミナーが開催された。今回は、「新しい歯科医学教授要綱と歯

学教育モデル・コア・カリキュラム」と題し、明海大学学長安井利一教授よりご講演をいただいた。

まず始めに、歯科医学教授要綱について、その成り立ちからこれまでの改定の経緯をお話いただいた。現在の歯科医学教育は、全ての学生が履修すべき必須の教育内容を精選し、必要最小限度の内容を提示した歯学教育モデル・コア・カリキュラムと歯科医師国家試験に示された出題基準に沿ってなされているが、今般の歯科保健医療福祉を囲む環境は大きな変化と進歩を示していることから、歯科医学教授要綱について再度内容を整理するとともに、国民に対しても歯科医学教育の内容及び歯科医師の保健医療福祉担当者としての役割を明確に示していく必要がある旨説明がなされた。

平成13年3月に歯学教育モデル・コア・カリキュラムが示されて以来、歯科医学・医療の内容や取り巻く環境が大きく変化したことを受け、更なる歯科医学教育の改善・充実に向け、平成19年5月にモデル・コア・カリキュラム改訂に関する恒常的な体制の構築がなされ、モデル・コア・カリキュラム改訂に必要な研究・調査、学生への教育効果の検証・評価、各大学での取り組み状況の検証、関係機関への周知の徹底等が行われるとのことであった。そして、今後診療参加型臨床実習を充実させていくことにより臨床技術の向上及び実際の患者との触れ合いによるコミュニケーション能力の向上を図っていく上で国民の理解と協力を得ていくことが必要である旨説明があった。当日は160名近い参加者が集まり、質疑応答も活発に行われ大変有意義なセミナーとなった。



講演される安井明海大学長：平成20年5月12日（月）、千葉校舎第2教室

■第23回カリキュラム研修ワークショップ開催

平成20年5月17日（土）、18日（日）、千葉校舎実習

講義室Ⅲ、Ⅳおよびホテルグリーンタワー幕張において、第23回カリキュラム研修ワークショップが開催された。学習目標の設定、学習方略の立案及び学習評価法の策定は教育原理として重要であることから、今回は、カリキュラム・プランニングの実践も取り入れ、本務教員20名、大学院生（TA）2名を対象に、カリキュラム・プランニング、問題点の解決法に関する9つのセッションからなるプログラムが実施された。4グループに分かれ、限られた時間内に討議、発表を行う凝縮された内容のワークショップに参加した受講者からは、「カリキュラム立案の考え方と指導に関する共通言語を身につけることができた」「カリキュラム・プランニングを実践してみるによりその難しさが分かった」等の感想が挙げられた。最後に、受講者に修了証書が授与され、2日間の日程を終了した。本ワークショップを今後も継続して実施することにより教育体制の改革と教育指導のより一層の充実を目指している。



講義風景：平成20年5月17日（土）、千葉校舎実習講義室Ⅲ

■東京歯科大学の将来構想に関する説明会開催

平成20年5月20日（火）午後6時より、千葉キャンパス講堂において、金子 譲学長による「東京歯科大学の将来構想に関する説明会」が教職員全員を対象に開催された。

本説明会は将来構想のメインテーマである「水道橋移転計画」について、およそ2年半前から発案され、本年3月に開催された法人理事会並びに評議員会で決定された経緯を始め、移転計画の基本理念、大学を取り巻く環境（外的要因・内的要因）、移転計画の基本構想、そして今後の計画までが順次説明された。

なお、本説明会は市川キャンパス講堂及び水

道橋キャンパス血脇記念ホールにもテレビ会議システムによって同時配信され、千葉校舎講堂がほぼ満員になった他、三施設全体でおよそ650名もの参加者が学長の説明に熱心に耳を傾けた。(詳細は本号3頁に記載)



説明をする金子学長：平成20年5月20日（火）、千葉校舎講堂

■平成20年度大学院新入生学外総合セミナー開催

平成20年度大学院新入生学外総合セミナーは、平成20年5月21日（水）から23日（金）の3日間にわたり、かずさアカデミアパークで行われた。大学院新入生42名の他、柳澤孝彰大学院研究科長、川口 充大学院教務部長、一戸達也大学院学生部長、及び講師として、佐野 司教授（歯科放射線学講座）、山本あや助教（歯科放射線学講座）が参加された。

第1日目は午前11時10分から開講式が行われ、その後大学院生の自己紹介が他己紹介という形式により行われた。この形式は二人一組となり、相手の事をリサーチし、互いに紹介するというものであった。そして午後1時30分より一戸大学院学生部長の「カリキュラムプランニング概論」、続いて山本助教の「大学院生活を振り返って」と題したセミナー講演が行われた。午後3時からは、大学院新入生の個人発表が行われ、各自が事前に海外論文を読み、その内容の紹介、考察などを、液晶プロジェクタを使用して7分間で発表、3分間の質疑応答を行う形式で進行し、教員からはプレゼンテーションの方法や考察のポイント等について貴重なアドバイスが送られた。個人発表終了後、大学院生は6グループに分かれて、各グループ毎にテーマを決めて、第1回目のグループ討議を行った。

また、第1日目の夜には、かずさアカデミアパーク

内「ヴィアール」において懇親会が催され、大学院生は教職員を交えて大いに語り合い親睦を深めた。

第2日目は、午前8時から前日に続いて個人発表が行われた。また、午前10時から、佐野教授の「医学統計学の基礎」と題したセミナー講演があった。午後に入ると前日同様、個人発表及びグループ討議が行われ、活発な質疑応答が交わされた。また、2日目の夜はアカデミアパークホテル2階「飛鳥」において、夕食及び懇談会が催された。

最終日にも、午前8時から最後の個人発表が行われたが、3日間の個人発表の中には、自分の将来の方向性をしっかりと見据え、今後の研究につながっていくようなレベルの高い発表が目白押しであった。そして午後1時から、グループ発表（各グループ7分）、質疑応答（各グループ5分）が行われた。各グループは短時間の討議ながら手際よく考察をまとめ、質疑応答も個人発表同様活発に行われた。最後に午後2時40分から、閉講式、及び講評が行われ、最優秀グループは表彰されて記念品が授与された。そして午後4時、全員無事に帰路に着いた。



ホワイトボード、及びデータベースを駆使したグループ討議：平成20年5月21日（水）、かずさアカデミアパーク



熱心に個人発表をする大学院生：平成20年5月21日（水）、かずさアカデミアパーク

トピックス

■『井上 裕資料室』開設

本法人 井上 裕理事長から、大学の歴史を語る貴重な資料の寄託、寄贈を受け、創立120周年記念事業の一環として、本年1月、「井上 裕資料室」を開設いたしました。

資料室には、理事長の勲章、幼少期からの私記や書簡、東京歯科医学専門学校時代の教科書・ノート、政治家時代の記録、寄贈された美術品等々、約3万点に及ぶ資料が保管され、そのうち約100点を展示しております。また資料情報をデータベース化しているため、千葉校舎の「大学史料室」とリンクすることが可能になり、これまで本学に蓄積されてきた大学史資料や歯科医学に関する資料等を多くの方へ展示・公開し、学生教育などに活用できる環境が整備されました。

本資料室は、水道橋校舎5階で歯科衛生士等の予備室として使用していた一室を平成15年に法人資料室として改修し、今回、部屋のレイアウトはそのままに整備いたしました。

今後は、本資料室、並びに大学史料室が本学の歴史を回顧する場として、また、将来への継承と発展に寄与することを期待し、更なる充実を目指すところであります。



最後に、開設にあたり、井上 裕理事長に対し、貴重な資料のご提供と約1年にわたる資料調査のご協力に深く感謝申し上げます。



■金子学長American Society of Dentist Anesthesiologist (ASDA) よりモンハイム賞受賞

平成20年5月1日(木)より3日(土)までアメリカ自治領プエルトリコにおいてAmerican Dental Society of Anesthesiology (ADSA) とAmerican Society of Dentist Anesthesiologist (ASDA) の合同年次総会が開催された。学会中の5月2日(金)にASDA会長のDr. Joel Weaver より金子 譲学長にモンハイム賞が授与され、金子学長は「Dental Anesthesiology in Japan」のタイトルで受賞記念講演を行った。モンハイム賞は1949年にアメリカで初めて歯科麻酔学講座を創設し、ADSA設立に携わったレオナルド モンハイムにちなんでASDAの名誉ある賞で、日本での歯科麻酔学の発



受賞後にASDA会長 Dr. Joel Weaverと記念撮影：平成20年5月2日(金)、プエルトリコにて

展ならびに歯科麻酔専門医制度の確立に貢献した金子学長に授与された。この賞のアジアでの受賞者は金子学長が初めてであることから、日本のみならずアジアの歯科麻酔学界においても大変有意義なことで、国際性の育成を教育の柱の一つとして掲げている本学において、学長自らがその国際性を示す受賞である。この受賞について、5月14日(水)に千葉病院歯科麻酔学講座の医局会で、5月27日(火)に水道橋病院口腔健康臨床科学講座歯科麻酔学分野の医局会で金子学長の講演が行われた。

■コンピュータ部、金子学長より図書カードを贈呈される

歯科学報は108巻1号から、またThe Bulletin of Tokyo Dental Collegeは49巻1号から表紙が変わり、本学創立120周年記念のロゴマークも加えられた。その表紙のデザインは、The Bulletin of Tokyo Dental Collegeがコンピュータ部全員で、ま

た歯科学報は117期生三島倫太郎君がデザインした。歯科学報の表紙には、ヒポクラテスの誓いの英文と本学が永遠に上に向かうことをモチーフとしたらせん階段が描かれている。

これらのコンピュータ部の貢献に対して、平成20年4月18日(金)に金子 譲学長より、コンピュータ部を代表して115期生齋藤研太君と三島倫太郎君に図書カードが贈呈された。



写真左から櫻井 薫学術出版部長、齋藤君、三島君、金子学長：平成20年4月18日(金)、学長室

■野口英世アフリカ賞授賞式及び記念晩餐会開催

平成20年5月28日(水)午後7時よりアフリカに関する医学研究及び医療活動を顕彰するものとして、この分野では初めての試みとなる記念すべき第1回野口英世アフリカ賞授賞式及び記念晩餐会が、パンパシフィック横浜ベイホテル東急クイーンズグランドボールルームにおいて開催された。

天皇皇后両陛下がご臨席された授賞式・記念晩餐会には、本学からは、野口英世記念会会長でもある高添一郎名誉教授(野口英世アフリカ賞委員会委員)、奥田克爾名誉教授(野口英世アフリカ賞選考委員会委員)、金子 譲学長(野口英世アフリカ賞募金委員会委員)、が出席された。

なお本賞は、医学研究部門ではブライアン・グリーンウッド博士(英国)、医療活動部門ではミリアム・ウェレ博士(ケニア)がそれぞれ受賞され、平成20年5月29日(木)午前10時より国際連合大学ウ・タント国際会議場において、受賞記念講演会が開催された。

「野口英世アフリカ賞」基金へのご寄附について

「野口英世アフリカ賞」基金へのご寄附を教職員の皆様をお願い申しあげましたところ、多くの教職員の皆様から本基金の趣旨をご理解頂き、本学全体としての募金目標額100万円を越える139万5千円のご寄附を頂きました。

寄附金は「東京歯科大学教職員一同」名義で平成20年2月22日付にて独立行政法人国際協力機構(JICA)へ寄附し、別途「寄付者名簿」を送付いたしましたところ、平成20年4月8日付、「野口英世アフリカ賞」募金委員会(代表世話人 衆議院議員 小泉純一郎他世話人2名連名による)よりお礼状を頂きましたのでご報告申し上げます。

なお、受賞者へ賞金と共に芳名録が手渡され、その中に教職員各位のお名前が記載されます。ここに、ご寄附頂きました教職員の皆様に厚く御礼を申し上げます。

「野口英世アフリカ賞」募金委員会委員

学 長 金 子 譲

学生会ニュース

■学生会主催新入生オリエンテーション開催

恒例の学生会主催新入生オリエンテーションは、平成20年4月12日(土)午後1時から教養棟第5教室で開催され、多数の新入生が出席した。

まず初めに、藤本 明学生会総務委員長(5年)より、学生会の活動内容について説明があり、クラブ活動も含め課外活動も積極的に参加し、文武両道の有意義な学生生活を送ってほしいとの「新入生へのエール」が贈られた。その後、渡邊美貴東歯祭実行委員長(3年)より東歯祭について、また小島佑貴歯科学生交流会局長(4年)より延世大 学校歯科大学との交流プログラムについて説明があり、引き続き運動系・文化系それぞれのクラブ・同好会の紹介が行われた。

クラブ・同好会の紹介は、午後1時20分～午後2時30分と午後2時40分～午後4時の二部に渡って行われ、パワーポイントや映像を駆使して魅力をアピールするクラブが見られる一方、ビッグバンドジャズ部やダンス部など実技の披露で魅せるクラ

ブもあり、また手作りのチラシを配布するクラブもありと新入生の眼を様々に惹きつけていた。また、昨年度に続いて歯科衛生士専門学校生もオリエンテーションに参加し、会場は超満員であった。

参加した新入生は熱心に説明に聞き入り、午後4時10分に終了すると直ちに興味を持ったクラブ・同好会の下を訪ね、先輩たちの温かい歓迎を受けた。



心地よい音色で新入生を魅惑する管弦楽部：平成20年4月12日(土)、千葉校舎教養棟第5教室

図書館から

■本学教員著書リスト

(本学の教員名が標題紙・奥付に記載されているものに限定)

小坂橋俊哉 編「デクスメデトミジンの使い方：基礎と応用」真興交易(株)医書出版部、2007

一戸達也 [ほか] 編著「もっと知りたい! 病気とくすりハンドブック」医歯薬出版、2008

(デンタルハイジーン 別冊)

矢島安朝 [ほか] 編「はじめてのインプラント治療」医歯薬出版、2008 (歯界展望 別冊)

小田 豊 [ほか] 編「コア歯科理工学」医歯薬出版、2008

石井拓男 [ほか] 編著「医療連携による在宅歯科医療」ヒョーロン・パブリッシャーズ、2008 (日本歯科評論 別冊)

○本学教員の著書については、特に収集に努めております。著書発刊のときには、できましたらご寄贈のほどよろしくお願いいたします。

■図書館ガイダンス開催

平成20年4月21日(月)から25日(金)までの一週間、千葉校舎図書館において「図書館ガイダンス」を開催した。今回は「図書の探し方と史料室」「和雑誌の文献の探し方」「洋雑誌の文献の探し方」の3コースから参加者の希望にあわせてガイダンスを行なった。参加者には図書館の蔵書検索やPubMed・医中誌などのデータベースを使って、



文献の検索実習を行う参加者：図書館閲覧室

実際に自分が探している資料をどのように手に入れるか、図書館ではどんなことができるのかを実習形式で紹介した。参加した学生、大学院生、研修生、教職員のアンケートからは、好評の声が届いている。今後も図書館をより有効に活用していただくために、多くの利用者に参加していただけるようなガイダンスを検討していきたい。

■黛 崇仁図書館員JPLAで講演

平成20年5月23日(金)、東京・一ツ橋の毎日コミュニケーションズにおいて開催された、平成20年度第1回日本薬学図書館協議会(JPLA)関東地区協議会において、黛図書館員が講師として招かれ「医学系図書館ウェブサイトのユーザビリティ」と題する講演を行った。ウェブユーザビリティとはウェブサイトの使い勝手のことであり、快適でより使いやすいサイトほどウェブユーザビリティは高い。東京歯科大学図書館ホームページは医学系図書館の中でも注目され、その作成に携わった黛図書館員が今回は、全国の医学系図書館ウェブサイトや東京歯科大学図書館ウェブサイトの事例を元に、解説を行った。講演後、質疑応答が活発に行われ内容の濃い60分であった。

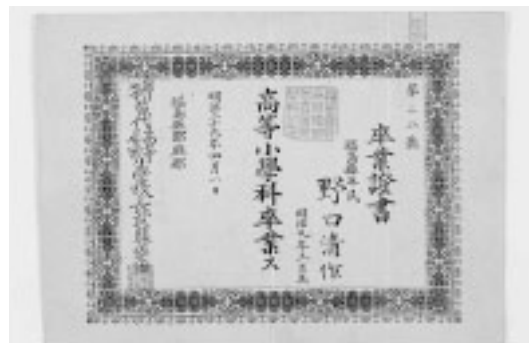


日本薬学図書館協議会で講演する黛図書館員(前列中央)：平成20年5月23日(金)、一ツ橋、毎日コミュニケーションズ

■野口英世に関する資料を国立科学博物館に展覧

平成20年5月20日(火)から7月21日(月)までの期間、国立科学博物館日本館において開催されている「Dr.NOGUCHI・世界を勇気づけた科学者・野口英世」展に、本学史料室所蔵の野口英世の卒業証書と賞状および図書館所蔵の野口英世の伝記「発見王野口英世」を、出展した。野口英世の卒業証書と賞状は、本学史料室のみ所蔵しているもので、野口英世の資料では大変貴重なもので

ある。その中の賞状三等賞の裏面には、「野苦智生伊差苦(のぐちせいさく)」という野口の署名が見られる。伝記「発見王野口英世」は、野口が存命中に出版され、なおかつ野口が目を通したのはこの伝記のみである。野口をひたすら神格化して、その後の道德教育における野口英世の伝記の手本となった。しかし、野口自身は、「これは悪い本だ。人間は誰でも完全ではないし、また完全でありたいとも思わない。人生に浮き沈みがないのは、作り話だけだ。」と不満を表したと言われている。



野口英世の高等小学校卒業証書



野口英世の伝記「発見王野口英世」：1921年(大正10年)刊行

■大学史料室から<史料室収蔵品紹介>



若き日の高山紀齋先生(写真)。撮影年月は不詳だが、「洋行帰りチャキチャキの高山先生」の解説がついている。(ご子息高山基氏のアルバムより)

歯科衛生士専門学校ニュース

■平成20年度歯科衛生士専門学校入学式

歯科衛生士専門学校第60期生の入学式は、4月4日（金）午前10時から千葉校舎講堂において、来賓、学校関係者、在校生ならびに新入生保護者臨席のもとに厳粛裡に挙行された。

式は橋本貞充学生部長による司会、開式の辞に始まり、国歌斉唱後、眞木吉信副校長から新入生一人一人が呼名・起立により紹介され、次いで下野正基校長が訓辞を述べられた。引き続き、井上裕学校法人東京歯科大学理事長の代理として熱田俊之助法人常務理事、金子譲東京歯科大学学長ならびに中井麗子歯科衛生士専門学校同窓会会長からご祝辞をいただいた。その後、在校生を代表して3年生の眞津奈桜さんが歓迎の辞を述べ、次いで新入生代表の小関千寛さんが誓詞を、また、新入生には歯科衛生士専門学校の徽章が校長より授与され、代表の下川永恵さんの襟に輝いた。最後に在校生のリードで出席者全員が校歌を斉唱し、式は滞りなく終了した。

入学式に続き、嶋村一郎教務部長から新入生ならびに保護者に、ご臨席頂いた来賓の方々および教職員が紹介された。新入生は記念写真撮影の後に、これからの新たな3年間を過ごすことになる教室に入り、学年主任・副主任から学校生活についてのオリエンテーションを受け、入学式当日の日程を終了した。



徽章を授与された新入生代表：平成20年4月4日（金）、千葉校舎講堂

訓 辞

東京歯科大学歯科衛生士専門学校
校 長 下野 正基

桜の花もほころび、まさに春たけなわの本日、ここに東京歯科大学学長ならびに東京歯科大学歯科衛生士専門学校同窓会長をはじめ、多数のご来賓のご臨席をいただき、平成20年度の入学式を迎えることができましたことは、誠に喜ばしいことと存じます。

新入生の皆さん、ならびに保護者の皆様、ご入学おめでとうございます。本校の教職員を代表して、心からお祝い申し上げます。

本校は、昭和24年、日本で最初に設立された歯科衛生士養成機関であり、来年創立60周年を迎えます。すなわち、本校の歴史は日本の歯科衛生士の歴史といっても過言ではありません。東京都千代田区で開校された本校は、平成元年にこの千葉の地に移転し、平成16年度からは歯科衛生士の修業年限を三か年として、口腔ケアのスペシャリストの養成のため、高いレベルの教育を実施しております。今日までの59年の間に2,066名の卒業生を世に送り出してきましたが、卒業生の方々はそれぞれ歯科医療や保健福祉の現場においてめざましい活躍をされています。

高齢社会を迎えた今、疾病構造の変化と関連して、健康に対する国民の考え方が大きく変化しています。医療の分野では、これまで疾病の状態にのみ高い関心が払われてきましたが、近年では患者のwell-being、つまり「健康で幸福な状態」やQuality Of Life、つまり「生活の質」についても考慮され、その重要性が認識されてきております。

口腔疾患についても、「cureからcareへ」といわれるように、careが予防の中心におかれるようになってきています。口腔疾患の予防や健康増進の視点から、歯科衛生士によるケアは疾病を有する患者

に限定されるものではなく、健康な人にも提供されるようになり、歯科衛生士が活躍する場は今後ますます広がっていくと考えられます。また、誤嚥性肺炎の予防など、高齢者の口腔ケアと全身の健康とが密接に関連することがエビデンスとして提示されるようになってきました。その結果、多くの総合病院が入院患者の口腔ケアの重要性を認識し、歯科衛生士の知識と技術を求めるようになってきております。

このような社会の多様なニーズに応えられる知識と技能を有する、歯科衛生士を育成することに、本校は全力で取り組んでおります。大学附属千葉病院および市川総合病院という恵まれた環境での臨床実習に加えて、地域の保健所、小学校、高齢者や障害者の医療・福祉施設における臨地実習にも大きな力を注いでおります。さらに、本校は学生一人一人が研究テーマを選択し、問題発見、問題解決型学習を目指した卒業研究をいち早く導入しており、これは全国の歯科衛生士養成機関の注目の的となっています。

我が国には、「能」などの芸事の世界で上達の段階をあらわす言葉として、「修」「破」「離」があります。「修」は「修める」という字を書きますが、その道の基本をしっかりと修め身につける段階であり、師匠のカタチをそっくり真似することをいいます。「破」は「破る」という字ですが、師匠の教えである「修」を破り、少しずつ自分なりのカタチを作り出す段階をいいます。さらに修行を積んで、道にとらわれずに離れ、自分独自の芸や技をみだすことを「離」といいます。「修」「破」「離」のうちでいちばん重要なのは最初の「修」であるとされています。つまり、何事も基本が大切であるということを示しています。

さて、新入生の皆さんは今日の日を迎え、入学の喜びと希望に溢れていることと思います。専門的な知識、そして高い技術を備えた歯科衛生士となるために、皆さんはこれから、歯科医学・医療に関する基礎や専門の科目はもとより、保健・福祉にわたる広い分野についての「基本」を学ぶこととなります。決して容易な道のりではありませんが、基本がもっとも重要であるということ肝に銘じてしっかり学んで下さい。そして、将来は「修」「破」「離」のステップを経て、口腔ケアのプロフェッショナルとしてオリジナリティあふれる自分独自の方法を開発していただきたいと思います。

3年間の学生生活が心身ともに健康で、実り多いものであることを心より祈念して訓辞といたします。

誓 詞

第60期新入生代表

小関 千寛

学校長訓辞の意を体して、克く学生の本分を尽くし、必ず素志を貫徹し、本校の伝統を昂揚するよう務めることを確く誓約いたします。

■平成20年度学生会総会ならびに新入生歓迎会開催

新入生46名を迎え、平成20年度歯科衛生士専門学校学生会総会が4月19日(土)午前11時30分から千葉校舎厚生棟1階において開催され、1年生から3年生までの全学年の学生全員が揃う初めての会合となった。学校からは、嶋村一郎教務部長、橋本貞充学生部長と専任教員が出席した。学生会役員の司会進行により、平成19年度活動報告と会計決算が承認され、続いて平成20年度活動計画案と予算案が満場一致で可決承認された。

総会に引き続き、新入生歓迎会が開催され、テーブル一杯の色とりどりの食事をとりながら談笑し、和やかな雰囲気のうちには進行した。最後にビンゴゲームで大いに盛り上がるなか、午後1時閉会となった。



3学年の全員が集合しての新入生歓迎会：平成20年4月19日(土)、千葉校舎厚生棟1階

■学外研修セミナー開催

第1学年と第2学年合同の学外研修セミナーが平成20年5月9日(金)、10日(土)に1泊2日の日程でウエルサンピア千葉において行われた。グループディスカッションとその発表を行うことで、問題発見、整理、解決に取り組み、協力し合う態度を身につけるとともに、学生同士の親睦を深めることを目的として毎年開催している。

午前10時30分より開講式が行われ、下野正基校長から十分に研修の成果を挙げることを期待することのご挨拶をいただいた。続いてプログラムに移り、言葉を用いなくて目標を達成するというコミュニケーショントレーニングを行って、まずは全員で緊張感をほぐした。次いで、にぎやかな昼食ののち、2年生による「口腔清掃用具に関する市場調査およびアンケート」に関する報告会を行った。8つの班ごとに歯ブラシや歯磨剤、歯間ブラ

シなどの身近な口腔清掃用具をテーマに、調査結果の発表が行われ、講義が始まってまだ日が浅い1年生も、熱心に興味深く耳を傾けていた。その後、1年生は「医師不足をなくすには」、2年生は「少子化を改善するには」をテーマにそれぞれ6班に分かれてKJ法によりディスカッションを行い、その結果をまとめて発表した。夕食をとり一息ついた後に、こんどは学年ごとに6班に分かれ、1年生は「レジ袋廃止」、2年生は「裁判員制度」をテーマに賛成派と反対派に分かれてディベートを行った。1グループにつき3回の対戦では、熱のこもった弁論と質疑応答が繰り返され、夜の9時過ぎに研修第1日目の日程を終了した。

2日目、朝7時からのバイキング形式の朝食に全員が元気な顔を見せた。8時15分から11時30分まで、1、2学年が合同でグループをつくり「ワーキングプアをなくすには」をテーマに、KJ法でアイデアを出しながらディスカッションを行い、その結果をまとめて2つの会場に分かれて発表した。そして2日間の研修を振り返り、最後に研修の自己評価表と報告書をまとめて閉校式にのぞんだ。コミュニケーションゲームとディベートで成績優



グループでのディスカッション：平成20年5月9日(金)、ウエルサンピア千葉



グループのまとめの発表：平成20年5月10日(土)、ウエルサンピア千葉

秀であったグループの表彰を行った後、下野校長より、研修の成果とねぎらいのご挨拶をいただき、

校歌斉唱と全員での写真撮影を行ってすべての日程を終了し、現地にて解散した。

創立120周年記念事業

■創立120周年記念事業マスコットキャラクター愛称決定

愛称 「ビバノスケ」



本年、3月から4月にかけて募集致しました本学創立120周年記念事業マスコットキャラクターの愛称が、教職員、学生等からご応募いただいた76点の作品の中から、平成20年5月30日（金）に開催された第3回創立120周年記念事業実行委員会において、「ビバノスケ」に決定されました。愛称の由来は、本マスコットのモチーフであるビーバーと本学の建学者として偉大なる足跡を残した血脇守之助先生のお名前をあわせたものであり、

角膜センタースタッフの皆様からご応募をいただきました。

■創立120周年記念式典・祝賀会開催日決定

創立120周年記念式典・祝賀会を平成22年5月22日（土）に開催することが、平成20年5月30日（金）に開催された第3回創立120周年記念事業実行委員会において決定され、同日開催された第649回理事會、第218回評議員会において報告、承認されました。

■創立120周年記念事業委員会・部会組織について

平成20年5月30日（金）に開催された第3回創立120周年記念事業実行委員会において、本事業の委員会・部会組織に学生関係行事部会（委員長：佐藤 亨学生部長）が追加されましたので、ご報告いたします。

人物往来

■国内見学者来校

千葉校舎・千葉病院

- 東京歯科技工専門学校（学生24名、教員2名）
平成20年4月21日（月）～22日（火）歯科理工学実習
- 旭川歯科学院専門学校（学生32名、教員3名）
平成20年5月13日（火）解剖標本室、病院、歯科衛生士専門学校他見学

市川総合病院

- 太陽歯科衛生士専門学校（教員3名）
平成20年4月2日（水）病院見学

■海外出張

- ピッセン弘子教授（水病・眼科）
American Society of Cataract and Refractive Surgeryで発表のため、平成20年4月1日（火）か

- ら11日（金）まで、アメリカ・シカゴへ出張。
- 茂木悦子准教授、野村真弓助教（歯科矯正）
第35回American Association for Dental Researchで発表のため、平成20年4月2日（水）から8日（火）まで、アメリカ・ダラスへ出張。
- 田辺耕士大学院生（歯科放射線）
画像診断に関する研修のため、平成20年4月10日（木）から平成21年3月31日（火）まで、アメリカ・ボストンへ出張。
- 宮田量平助教（市病・外科）
米国癌学会（American Association for Cancer Research）で発表のため、平成20年4月14日（月）から18日（金）まで、アメリカ・サンディエゴへ出張。
- 村上 聡助教（歯科医学教育開発センター）
第1回Korean Academy of Laser Dentistry総会學術大会で講演のため及び、レーザー医学教育に

- 関する意見交換のため、平成20年4月19日(土)から20日(日)まで、韓国・ソウルへ出張。
- 片倉朗講師(口腔外科)
Biomet 3i Global Symposiumに出席のため、平成20年4月23日(水)から28日(月)まで、アメリカ・シカゴへ出張。
- 島崎潤教授、富田真智子助教、原島歩美臨床専修医、比嘉一成研究技術員(市病・眼科)、吉田悟客員講師、重安千花臨床専修医(角膜センター)
Annual Meeting of Association for Research in Vision and Ophthalmologyで発表のため、島崎教授、富田助教、吉田客員講師、比嘉研究技術員、は4月25日(金)から、原島臨床専修医、重安臨床専修医は4月27日(日)から、5月3日(土)まで、アメリカ・フォートローダデールへ出張。
- 金子譲学長(大学)
IFDAS理事会出席のため及び、American Society of Dentist Anesthesiologistsからのモンハイム・アワード受賞のため、平成20年4月26日(土)から5月5日(月)まで、米国自治連邦区・プエルトリコへ出張。
- 篠崎尚史センター長(角膜センター)
渡航移植と臓器密売についての国際移植学会会議へ出席のため、平成20年4月28日(月)から5月4日(日)まで、トルコ・イスタンブールへ出張。
- 堀江由規子レジデント、藤本かな子レジデント(水病・歯科矯正)
American Associations of Orthodontists 108th Annual Sessionで発表のため、平成20年5月15日(木)から21日(水)まで、アメリカ・デンバーへ出張。
- 市川仁志助教(市病・消化器科)
米国消化器病学会で発表のため、平成20年5月16日(金)から20日(火)まで、アメリカ・サンディエゴへ出張。
- 東郷聡司助教、伊達彩乃レジデント、柿本朱レジデント、小高紅美レジデント(歯科矯正)
American Association of Orthodontists 108th Annual Sessionで発表のため、また、伊達レジデント、小高レジデントはUniversity of Southern Californiaの見学のため、平成20年5月17日(土)から、東郷助教、柿本レジデントは21日(水)まで、伊達レジデント、小高レジデントは24日(土)まで、アメリカ・デンバーへ出張。
- 高松潔教授(市病・産婦人科)
第12回国際閉経学会で発表及び会議出席のため、平成20年5月19日(月)から24日(土)まで、スペイン・マドリードへ出張。
- 野村武史講師(口腔外科)
北京大学口腔顔面外科学研究室の視察及び、第12回国際口腔癌学会で発表のため、平成20年5月20日(火)から25日(日)まで、中国・北京及び上海へ出張。
- 井上孝教授(臨床検査)
延世大学歯学部40周年記念式典シンポジウムにシンポジストとして参加のため、平成20年5月21日(水)から24日(土)まで、韓国・ソウルへ出張。
- 白石建教授、山根淳一助教(市病・整形外科)
ヨーロッパ頸椎外科学会へ参加及び発表のため、また、低侵襲脊椎外科研究会へ参加のため、平成20年5月25日(日)から6月2日(月)まで、スイス・ジュネーブ及び、イタリア・ミラノへ出張。
- 吉成正雄教授(口腔科学研究センター・口腔インプラント学研究部門)
8th World Biomaterials Congressへ参加及び発表のため、また、ナイメヘン大学と研究打ち合わせのため、平成20年5月27日(火)から6月3日(火)まで、オランダ・アムステルダムへ出張。

大学日誌

平成20年4月

- 1 (火) レジデント辞令交付式
専任教育職員辞令交付式
RR・PF・RA・TA辞令交付式
教務部(課)事務連絡会
歯科臨床研修開始式
- 1 (火) 学年主任・クラス主任会
学生部(課)事務連絡会
省エネルギーの日・防災安全自主点検日
新採用者オリエンテーション(市病)
水道橋病院教職員辞令交付(水病)
歯科医師臨床研修開始式(水病)

1 (火)	臨床研修作業部会 (水病)	14 (月)	臨床教育委員会
2 (水)	リスクマネージメント部会 ICT会議 大学院事務連絡会 千葉校舎課長会 口腔健康臨床科学講座会 (水病)		医局長会 教養科目協議会 医療安全研修会
3 (木)	臨床研修医辞令交付式 (市病)	15 (火)	臨床教授連絡会 臨床修練委員会 全体教授会
4 (金)	歯科衛生士専門学校入学式 口腔外科改革委員会 (水病)		人事委員会 歯科衛生士専門学校教員会
5 (土)	入学式		環境清掃日・危険物・危険薬品廃棄処理日
7 (月)	新入生・学士編入学者オリエンテーション 5年生登院器材刻印・検査 5年生オリエンテーション 医療連携委員会 歯科衛生士専門学校2年生前期授業開始 歯科衛生士専門学校1年生オリエンテーション (~8日)		看護部運営会議 (市病)
8 (火)	5年生 (115期) 登院式 2・3・4年オリエンテーション 新入生水道橋校舎・病院並びに市川総合病院見学 総合歯科管理運営委員会 (水病)	16 (水)	新入生学外セミナー (~18日)
9 (水)	1・2・3・4年生前期授業開始 基礎教授連絡会 大学院運営委員会 大学院研究科委員会 歯科衛生士専門学校1年生前期授業開始 救急委員会 (市病) ICU運営委員会 (市病) リスクマネージメント部会 (水病) 薬事委員会 (水病) 医薬品安全管理委員会 (水病)	17 (木)	業務連絡会 先進医療委員会 部長会 (市病) 管理診療委員会 (市病)
10 (木)	大学院入学式 大学院オリエンテーション 薬事委員会 (市病) 手術室運営委員会 (市病) 臨床研修歯科医保険医登録講習会 (水病) 水道橋病院症例報告会 (水病)	18 (金)	千葉病院医療連携協議会
11 (金)	ICT委員会 (市病)	21 (月)	大学院春期ベーシックセミナー (21日 23日~25日、5月7日・8日) 第73回歯科医学教育セミナー 機器等安全自主点検日 医療安全管理委員会 (水病) 感染予防対策委員会 (水病) 個人情報保護委員会 (水病) 科長会 (水病)
12 (土)	学生会主催新入生オリエンテーション	22 (火)	薬事委員会 データ管理者会議 カルテ整備委員会 診療記録管理委員会
14 (月)	病院運営会議 個人情報保護委員会 医療安全管理委員会 感染予防対策委員会 (ICC)	23 (水)	病院連絡協議会 (水病) 診療録管理委員会 (水病) サービス向上委員会 (水病)
		24 (木)	千葉校舎課長会 院内感染症予防対策委員会 (市病)
		25 (金)	クリニカルパス委員会 社保委員会 (水病)
		28 (月)	看護部運営会議 (市病)
		30 (水)	全学休講日 (~5月2日)
		平成20年5月	
		1 (木)	全学休講日 (~5/2) 省エネルギーの日・防災安全自主点検日 監査法人会計監査 (市病)
		2 (金)	第22回カリキュラム研修ワークショップ (TA対象)

2 (金)	監査法人会計監査 (市病) ICT委員会 (市病)	15 (木)	科長会 (水病)
7 (水)	リスクマネージメント部会 ICT会議 大学院事務連絡会 大学院春期ベシックセミナー (~8日) 監査法人会計監査 (市病) 口腔健康臨床科学講座会 (水病)	17 (土)	第23回カリキュラム研修ワークショップ (~18日) ふれあい看護体験 (市病)
8 (木)	振替授業 (火曜日分) 監査法人会計監査 (市病) 手術室運営委員会 (市病)	19 (月)	病院運営会議 個人情報保護委員会 医療安全管理委員会 感染予防対策委員会 (ICC) 医局長会 医療安全研修会 看護部運営会議 (市病)
9 (金)	電気設備法定検査 (~11日) 教務部 (課) 事務連絡会 歯科衛生士専門学校1・2年生研修セミナー (~10日) 監査法人会計監査 (市病) CPR+AED講習会 (市病) 看護部運営会議 (市病) 感染予防指導チーム委員会 (水病)	20 (火)	薬事委員会 (市病) 決算監査 (~23日) (水病) 歯科技工室改革委員会 (水病) 臨床教授連絡会 講座主任教授会 人事委員会 教養科目協議会 機器等安全自主点検日
12 (月)	公認会計士決算監査 (~16日) 臨床教育委員会 第74回歯科医学教育セミナー 矯正歯科改革委員会 (水病)	21 (水)	大学院新入生学外総合セミナー (~23日・かずさアカデミアパーク)
13 (火)	歯科衛生士専門学校臨床実習委員会 院内褥瘡対策委員会 (市病)	22 (木)	千葉校舎課長会 業務連絡会 保険診療検討委員会 (市病) 院内感染症予防対策委員会 (市病)
14 (水)	基礎教授連絡会 千葉校舎課長会 大学院運営委員会 大学院研究科委員会 学生部 (課) 事務連絡会 救急委員会 (市病) ICU運営委員会 (市病) リスクマネージメント部会 (水病) 薬事委員会 (水病) 臨床検査室委員会 (水病) 放射線委員会 (水病)	23 (金)	水道橋病院研修管理委員会 (水病) クリニカルパス委員会 (市病) 社保委員会 (水病)
15 (木)	高度・先進医療委員会 環境清掃日 危険物・危険薬品廃棄処理日 部長会 (市病) 管理診療委員会 (市病) 医療安全管理委員会 (水病) 感染予防対策委員会 (水病) 個人情報保護委員会 (水病)	24 (土)	歯科衛生士専門学校説明会
		26 (月)	医療連携委員会 第267回大学院セミナー 情報システム管理委員会 診療録管理委員会 (電子カルテ運用管理委員会) (市病) 外部用監査 (~27日) (水病) 水道橋病院教職員研修会 (水病)
		27 (火)	データ管理者会議 カルテ整備委員会 診療記録管理委員会
		28 (水)	健康管理実施部会 (水病) 病院連絡協議会 (水病) 診療録管理委員会 (水病)
		30 (金)	理事会 (法人) 評議員会 (法人)

【訂正】

広報第228号の記事中に次の間違いがありましたので、お詫びして訂正致します。

8頁 右段9行目 (誤) 准看護師 横江ナツエ氏 → (正) 看護助手 横江ナツエ氏

東京歯科大学広報 編集委員

内山健志 (委員長)

浦田知明 江波戸達也 王子田 啓 金安純一 河田英司 坂本智子 椎名 裕 柴家嘉明 新谷益朗
高木直人 田口達夫 野島靖彦 伴 英一郎 橋本貞充 三木敦史 米津博文 (平成20年3月現在)

編集後記

金子 譲学長は、教職員を対象とした本学の水道橋移転についての説明会を5月20日になされました。将来計画については、本広報において、順次で説明されていくとのことです。今号は、経緯だけでなく、移転理由が掲載されておりますので、熟読していただきたいと存じます。

さて今年、本学は学士編入学者を加え、133名の新入生を迎えました。特筆すべきは、そのうち4名の外国人留學生が入学してきたことです。国籍は大韓民国と中華民国で、それぞれ2名ずつ、元気よく名前を呼ばれて返事をしていました。文科省の指導の下、国際交流の促進は、今日的な大学のmissionのひとつですが、ボーダーレスの国際化が本格的になってきた感がいたします。キャンパスが益々華やかになることが期待されます。

写真はご存知、東京、浅草、浅草寺の雷門です。朱塗りの山門をはじめ松下幸之助が寄進した大提灯、安置されている風神、雷神などを見るために各国から観光客が多く集まり、日本を象徴する風景になっております。初夏には三社祭が、盛夏になると浅草サンバカーニバルも加わって現代の浅草の国際化に一役買っております。

江戸時代、雷門の名は、すでに川柳に登場しております。その浅草から、鳥越さらに神田を経て日本橋にいたる下町は、大坂からの商人だけでなく、藩という閉塞した社会から脱した全国の人たちが集り、出身も職業も問わない町人の社会でした。あたかも多民族国家のアメリカ合衆国に似た、一種のボーダーレス社会になっていたと思われまふ。しかし、そのようなところが秩序を保ち、文化の華をさかせることができたのは、おのずと、独特の規律とか規範があったことでありましよう。

(広報・公開講座部長：内山健志)



浅草寺雷門